

高崎市文化財調査報告書第99集

山名原口Ⅰ遺跡

後期古墳と奈良・平安時代の集落の調査

1990

群馬県高崎市教育委員会

高崎市文化財調査報告書第99集

山名原口Ⅰ遺跡

後期古墳と奈良・平安時代の集落の調査

1990

群馬県高崎市教育委員会

序

高崎市は古くから交通の要衝として、また北関東の中心的都市として栄えてきました。しかし、最近では急激な都市化の波のなかで、その姿を目まぐるしく変えつつあります。

社会の発展のためには、積極的な基盤整備や開発事業は不可欠であります。しかし、こうした事業は貴重な自然環境や遺跡を破壊しかねない側面をもっており、将来を見据えて慎重に行わなければなりません。

本遺跡の北には山ノ上碑、山ノ上古墳が存在し、また遺跡地から東にかけて多くの小古墳が良好に残っている重要な地域であります。こうした地に職業訓練大学校が建設されることになったため、関係者並びに関係機関は慎重な対応を重ねて参りました。

今回調査を行った古墳や、奈良・平安時代の集落などの発掘資料が、郷土の理解と地域史の解明に役立てば幸いです。

最後になりましたが、事業の円滑な遂行にご協力くださいました、地元関係者並びに関係諸機関に厚く御礼を申し上げます。さらに、発掘調査及び整理作業に従事して下さった皆様方に、感謝の意を表しまして序と致します。

平成2年3月

高崎市教育委員会
教育長 茂田治男

例言

1. 本書は、群馬県職業訓練大学校校舎建設に伴う、埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の所在地 高崎市山名町919、920、923、924、925、927、928、929、931、932、933、934、935、936、937、938、940、942、943、945、947、949、950番地。
3. 発掘調査面積 7502㎡
4. 調査組織 高崎市教育委員会社会教育課文化財保護係
 <事務局> 串田哲夫 横倉興一 中澤寛哉
 <調査担当> 中村 茂 関口 修 星野守弘
5. 調査期間
 <発掘作業> 昭和63年6月1日～昭和63年10月13日
 <整理作業> 平成元年3月11日～平成2年3月29日
6. 本書の編集、本文執筆は担当者の協議の上、関口が行った。
7. 遺構写真は担当者が、遺物は中村氏が撮影した。
8. 遺物、写真、図面等の資料は高崎市教育委員会が保管している。
9. 調査にあたって、基準点測量は榊田中測量設計、空中写真撮影は御青高館、表土掘削は榊井上総合リースに委託した。
10. 高崎市教育委員会遺跡調査番号は123である。
11. 石材鑑定は飯島静男氏に依頼した。
12. 発掘調査及び本書作成にあたり、下記の方々にご指導、ご教示を頂いた。(敬称略)
 田島柱男 鬼形芳夫 石塚久則 田口一郎 小島敦子

凡例

1. 遺構図中にある矢印記号は、全て国家座標第IX系における北方向を示す。
2. 遺構図は縮尺をスケールで表している。なお、遺物図は1/5を原則としている。
3. 遺構図の1点鎖線は等高線である。
4. 土層及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「標準土色帖」(1987年版)を参考にした。
5. 本書で用いた遺構の略号は以下の意味を表す。

SD	溝	SI	住居跡
SK	土坑	SZ	古墳

目 次

例言

凡例

目次

第Ⅰ章 発掘調査の実施と経過

第1節 発掘調査に至る経緯と調査の経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経緯	1
第2節 調査の方法	2
第3節 基本土層	3

第Ⅱ章 遺跡の地理的歴史的環境

第1節 遺跡の地理的環境	4
第2節 遺跡の歴史的環境	4

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要	6
第2節 調査位置と周辺の古墳	7
第3節 古墳	8
1. 1号墳	8
2. 2号墳	19
第4節 集落の調査	25
1. 住居跡	25
第5節 出土遺物観察表	75

第Ⅳ章 まとめ

第1節 古墳について	97
第2節 住居跡出土の土器について	98

写真図版

第Ⅰ章 発掘調査の実施と経過

第1節 発掘調査に至る経緯と調査の経過

1. 調査に至る経緯

高崎市は遺跡が多い場所として知られている。特に古墳時代には観音塚古墳、観音山古墳などの大前方後円墳や、碑文から古墳の被葬者を推定できる山ノ上古墳など貴重なものが多い。しかし、こうした有名な古墳だけでなく、古代を復元するためには群集墳に代表される小円墳や集落の調査が大切である。また、歴史の証人としての遺跡は長く後世に残していかなければならない。

今回発掘調査対象の高崎市山名町は、墳丘を留める古墳が、前方後円墳の伊勢塚を中心として数多く残っている。また、観音山丘陵には山ノ上碑が、隣の吉井町には多胡碑が存在する。多胡碑の碑文と続日本紀の記事から、ここが山名郷とも指摘されている。

こうした貴重な遺跡が眠る地に、群馬職業訓練大学校を建設することでもあり、高崎市教育委員会としては慎重な対応が迫られた。しかし、開発担当部局と話し合いの中で、将来を担う人たちの学校建設は重要な事業であることとの要請があった。教育委員会としては次善の策として、十分な調査を行い資料を保存するとの回答を行った。よって、文化財保護課の職員を担当とする発掘調査を行うこととなった。

2. 調査の経緯（日誌抄）

昭和63年6月1日 桑の抜根開始。

6月4日 プレハブ設置。

6月8日 重機による表土掘削開始。

6月13日 1区で住居跡を2軒確認。

6月16日 1区、3、4、5号住居跡精査。

6月23日 2区、7、8号住居跡精査。

7月1日 3区、2号古墳調査。

7月2日 6区遺構確認開始。

7月5日 6区、1～5号溝精査。

7月9日 4、5区遺構確認開始。

7月11日 6区、9号住居跡調査開始。

7月14日 1号古墳調査、西側の周堀は途切れている。古墳周堀の北と南でセクション図をとる。

7月20日 1号古墳周堀精査。

- 7月22日 1号古墳墳丘部精査。3区、16号住居跡精査開始。
- 7月25日 1号古墳石室内精査、鉄鏝、耳環、壺出土。
16号住居跡、埴、羽釜あり、刀子と砥石も検出。
- 7月26日 3区、17号住居跡調査、遺物はない。覆土から中世の遺構と考えられる。
- 8月1日 2号古墳周堀部精査、土器片多数出土。
- 8月3日 3区、19号住居跡調査。
- 8月5日 4区、25号住居跡とそれに切られた26号住居跡を調査。
- 8月13日 5区32号住居跡、4区33号住居跡調査。
- 8月20日 1、2、3区と伊勢塚古墳を空中撮影。
- 8月23日 6区35号住居跡は炭化材が多い。焼失家屋の可能性あり。
2号墳中央部から石室は壊れているが、地業石検出。
- 8月27日 2号古墳精査。
- 9月12日 1、2号古墳実測。
- 9月14日 6区、12、37、40、42号住居跡平面図終了、遺物上げ。
- 9月17日 1号墳裏ごめの調査開始。
- 9月26日 5区西、砂礫層をきる住居跡調査、土器片多数、鉄製紡錘車出土。
- 10月4日 6区、35号住居跡に切られる49号住居跡確認。
- 10月7日 6区、50号住居跡を精査する。1辺5mと大型。
- 10月11日 6区、51号住居跡平面図終了、遺物上げ。
- 10月12日 現地での発掘作業終了、引越し。

平成元年3月11日 整理作業開始、土器洗い。

3月14日 図面整理、以下平成元年度整理・報告書作成作業継続。

第2節 調査の方法

調査前大部分が桑畑であったため、機械によって桑の根を除去した。その後、掘削機で表土剥ぎを行った。調査区は1～10までの通し番号で設定した。住居跡や土坑、溝などの遺構確認は地山である黄褐色土面で行なった。また1号古墳は墳丘が残存していたため、墳丘及び周堀の調査を行う方針を立てた。なお、2号古墳は当初墳丘がなかったためトレンチを入れ、その位置を確認した。遺構測量用の杭は、国家座標第Ⅲ系の任意の点を選択し、杭うちは業者に委託した。遺構測量は住居跡、古墳石室は1/4を原則とした。また、遺構相互及び等高線を入れた全体図は1/4の縮尺で平板測量を行った。記録写真は35mmモノクローム、カラーリバーサルを併用した。また、バルーンによる空中写真を全景を撮影するために用いた。

第3節 基本土層

遺跡地の南には蒲川、北には観音山丘陵がある場所、蒲川の河岸段丘上である。蒲川の対岸は、古くは埴輪をはじめ現在は藤岡瓦の産地として有名である。本遺跡の基盤層が藤岡と対応するかどうかは不明であるが、標準土層のⅤ層は粘土質で非常に粘性が強く、乾くとカチカチになる土である。このⅤ層は風成堆積のローム層ではもちろんなく、起源は川などによる二次的堆積物と考えられる。その過程での粘土化であろう。

Ⅴ層中には、部分的にはあるが、標準土層のⅥ層とした、やや大きめの転石を主体とする砂礫がある。この砂礫は調査区では4区と5区、10区で大きく広がっている。5区の46号、47号住居跡はこの砂礫を掘り込んで造られていた。

Ⅰ層は浅間A転石（As-A）を含む土層であり、浅間の大噴火（1783年）以降の土層である。Ⅱ層は同じく浅間B転石（As-B）を含む層である。このB転石の降下年代は1108年と考えられており、それ以降の堆積層である。Ⅲ層は浅間C転石（推定4世紀中葉）を含む褐色土で古墳の石室や、住居跡の大部分はこの土で覆われていた。Ⅳ層はやや黒ずんだ土で、Ⅴ層の腐植化した層と考えられる。

Ⅰ	
Ⅱ	
Ⅲ	
Ⅳ	
Ⅴ	Ⅵ

- Ⅰ 灰褐色土。浅間A転石（1783年噴出、以下As-Aと称す。）を含む。
- Ⅱ 暗褐色土。浅間B転石（1108年噴出と推定される、以下As-Bと称す。）を含む。
- Ⅲ 褐色土。
- Ⅳ 腐植層。Ⅴ層の腐植化した土。
- Ⅴ 黄褐色土。粘性に富むシルト質土層。
- Ⅵ 砂礫層。

第1図 基本土層図

第Ⅱ章 遺跡の地理的歴史的環境

第1節 遺跡の地理的環境

本遺跡(1)は高崎市街地から南東へ5.5kmの位置に存在する。遺跡地の北方は観音山丘陵である。また、南には利根川の支流である鍋川が東へ流れる。鍋川はやがて鮎川、さらに鳥川と合流する。

遺跡地は鍋川の上位段丘面であり、観音山丘陵には鍋川の浸食の跡が残っている。また、遺跡地は段丘の端部であり、すぐ南は一段下がった地形となる。遺跡地の東は、現在は集落となっている。また付近は、桑畑を中心とした畑地である。北側は圃場整備が既に終了済みであり、水田地帯となっている。なお、この周辺の土地の基盤層は、風化が進んだ粘性の高い土で、磨滅した礫が混じっており、再堆積の層と考えられる。

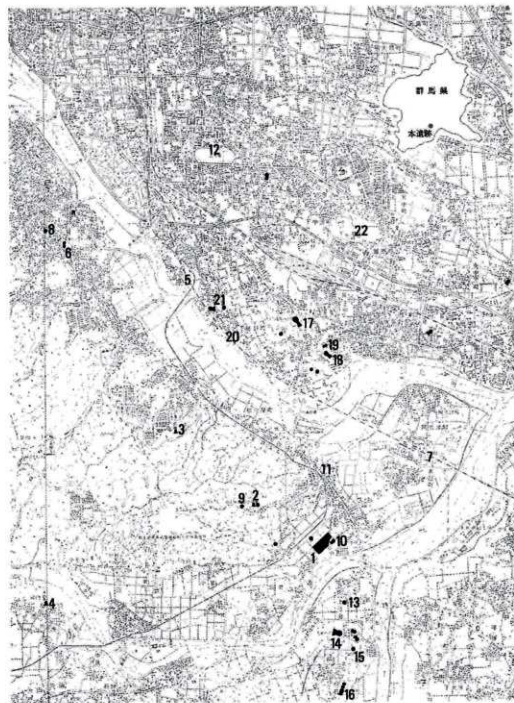
第2節 遺跡の歴史的環境

旧石器時代では、この地からやや遠いが藤岡の北山遺跡、三ツ木東原遺跡が著名である。しかし、遺跡地近くでは旧石器時代の遺構遺物の検出例はない。縄文時代では藤岡市の中大塚遺跡で敷石住居が、谷地遺跡では前期から後・晩期の土器が出土している。また、吉井町の黒熊遺跡では草創期から中期までの遺構遺物が検出されている。また、同時に草創期の槍先形尖頭器が出土している。

弥生時代では藤岡市の沖Ⅱ遺跡検出の前期再葬墓群が名高い。また、中期後半の土器は競馬場遺跡(12)、竜見町遺跡など高崎市街地近くで発見されている。後期では城南小校庭遺跡、高岡村前遺跡などで調査例がある。

古墳時代になると、付近は大規模な古墳が多い地域である。5世紀に、全長123mの大鶴巻古墳(18)、同じく全長171mの浅間山古墳(17)の前方後円墳が築造される。また、5世紀中葉には、全長170mの白石稲荷山古墳(16)が著名である。この古墳の北には、やや小型で方形の十二天塚古墳、十二天塚北古墳が造られている。舟形石棺を有するやや小さい前方後円墳である小鶴巻古墳(19)や、直径58mあまりの三島塚(6)は円墳であるが、ともに5世紀の首長墓と考えられる。

5世紀後半ないし6世紀にかけては、全長146mの大前方後円墳である七雲山古墳(14)が築造される。内堀、外堀の他に前方部に三重目の溝をもつ、この時期としては地域で最大の古墳である。6世紀の横穴式石室を有する古墳としては、土合Ⅰ、Ⅱ号墳(11)、銅鏡が出土した石原稲荷山古墳(8)、玄室に載石、前室と羨道が自然石を使用した皇子塚(15)、墳丘が不整八角形で、石室が横溝積みで有名な伊勢塚古墳(13)などが挙げられる。湊山古墳(21)は全長61mの前方後円墳で、巨大な石室をもつ。なお、本遺跡の周辺でも、小規模な前方後円墳



第2図 周辺の遺跡

である伊勢塚（10）を中心として、群集墳が形成されている。なお、7世紀以降の古墳としては、山ノ上碑のそばにある山ノ上古墳（2）、及び山ノ上古墳（9）などがある。

遺跡地の北の観音山丘陵には、金井沢碑（3）、山ノ上碑（2）がある。また、西に3km程行くと多胡碑（4）がある。この碑は「上野國片岡郡…并三郎内三戸郡成」と記されており、建碑とされている。従日本紀の記事には「片岡郡の山」とあり、「山」を「やまな」と解釈し、現在の山名の地に比定する説もある。

奈良・平安時代の集落は、舟橋（5）、下佐野（20）、田端遺跡（7）。また、藤岡市では新堀、北原、上栗須、中1、中2遺跡、吉井町では塚原、黒熊遺跡などで調査されている。

平安時代1108年の浅間B経石下の水田跡は藤岡の小野地区、倉賀野、下中居（22）地区など調査例が多い。また、山名町では南八幡小学校のそばで水田遺構を確認している。

中世の山城は観音山丘陵に多い。山名城、根小屋城、茶臼山城などである。烏川対岸の倉賀野城は大規模な平地につくられた戦国時代の城である。また、倉賀野城周辺では、倉賀野万福寺II遺跡において小規模な屋敷跡が調査されている。

第三章 検出された遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

○旧石器・縄文時代

旧石器時代遺構・遺物は検出されなかった。縄文時代の遺構は検出されなかったが、遺跡地の覆土中から縄文時代の土器片が出土している。

○弥生時代

弥生時代の遺構・遺物は検出されなかった。

○古墳時代

古墳時代は古墳が2基検出された。1号墳は、横穴式石室を有する円墳で、周堀中からは、墳丘から崩れ落ちた埴輪と葺石に使われた川原石が多数出土した。石室は未固結凝灰岩の切石で築かれ、出土物からは6世紀後半の築造と考えられる。

2号古墳も横穴式石室を主体部とした古墳と考えられる。しかし、石室は残存しておらず、検出したのは古墳中央部に石室の壁石を置くための地業石だけであった。この古墳も埴輪を有する古墳で、6世紀後半の築造と推定される。

古墳時代は古墳を検出しただけで、住居跡は検出しなかった。また、土師器の環や甕等の出土がないので、近くに集落があったとは考えられない。古墳時代は墓域であったと考えられる。

○奈良・平安時代

奈良・平安時代の堅穴住居跡は、合計50軒検出した。最古の住居跡では、須恵器の底部は手

持ちヘラケズリ調整されている。また、土師器環は半球形で、甕は器内が薄く、胴部が長胴である。その特徴から8世紀前半頃と考えられる。また、最も新しい住居は羽釜や底部が糸切り離しのままの灰輪陶器が出土し、10世紀と考えられる。

○中近世

中世と見られる堅穴状遺構が1号古墳の東で検出された。出土遺物はないが、内部に8本の主柱穴を有している。竈や炉は検出されなかった。近世は浅間A経石下の畠跡を検出した。

第2節 調査位置と周辺の古墳

第3図は、調査を行った位置と周辺に存在する古墳の位置を示した図である。今回の調査では1～10までの調査区を設定した。2区とした部分には、調査前も墳丘が確認出来る古墳が存在していた（1号古墳）。なお、10区の東にある前方後円墳は伊勢塚であり、10区は伊勢塚の周堀位置となる。しかし、この位置では伊勢塚の周堀は検出されなかった。小古墳は丸で表した。そのうち黒丸は、昭和59年～60年にかけて、高崎市が行った分布調査で墳丘を確認した古墳である。また、白丸は昭和10年調査の「上毛古墳調査」に記載されているが、現在墳丘を確認できない古墳の位置を図化したものである。

これらの小古墳は横穴式石室を有する後期古墳が多いとみられる。なお、調査区の北の区画整理された中にある稲荷塚からは、地元の方に何うと舟形石棺が見つかったという。稲荷塚は5世紀の首長墓の可能性が高い。



第3図 調査区と周辺の古墳

第3節 古墳

1. 1号墳

1号墳は2区の東部に位置する。この古墳は上毛古墳総覧（南八幡地区）ではもれているが、高崎市が1984年から1985年まで行った分布調査では、その存在が確認されている。調査の結果、古墳は基壇をもつ二段築成の円墳であった。墳丘は石室付近と基壇東側の一部に残っているが、それ以外は削平されている。

墳丘の規模は南北16.5m、東西15.5mである。周堀は、幅4mから7m、深さ60cm程度で、南西部分が途切れている。周堀中には、葺石に使用された転石が崩れ落ち、墳丘の近くに数多い。しかし、原位置の石はない。また周堀中からは、埴輪が破片となって出土している。円筒埴輪及び朝顔形埴輪は周堀の全般から出土するのに対し、人物などの形象系の埴輪は、石室南東に集中する傾向にある。なお、墳丘東部の基壇で、埴輪の基底部を埋めたと考えられる小さなピットを5個検出した。Na1ではピット中に埴輪の基底部が残っている。なお、これらのピットの配置から、埴輪は70cmから80cmの間隔で並んでいたとみられる。

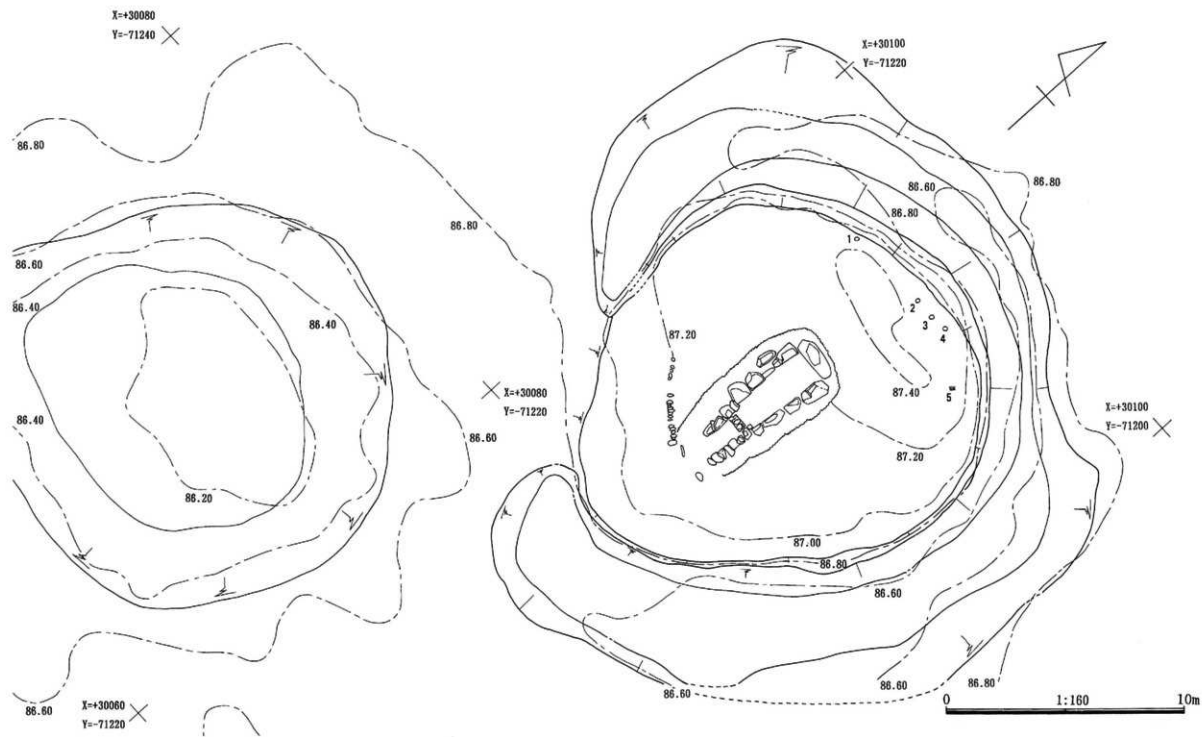
主体部は横穴式石室である。天井石はすでに無く、側壁の2段目の石もかなりの部分が取り除かれている。石室の全長は東側で3.97m、玄室は右側で3.57m、左側は3.40mで、玄室幅は奥壁寄りで1.45mである。羨道部は長さ3.40m、最大幅0.91mである。主軸は北2度20分西を向く。玄室は両袖型で、玄室側壁には弱い胴張りが認められる。なお、羨道部玄室寄りには、しきみ石が置かれている。また、羨道部には、比較的大振りな石を積み上げた閉塞施設がある。

玄室は大きめの川原石を厚さ20cm程、その上に3cm～10cm大の石を敷き上面を棺床としている。石室壁材は未固結凝灰岩の切石である。旧地表の上には地業石が敷かれているが、壁石は旧地表面上に直接置かれている。なお、壁石を置く時に、地面を少し掘り窪めている。玄室の奥壁は1石、大きな石を立て、側壁は玄室部では根石は広口が、2段目は横口面が使われている。一方、羨道部は横口の石が多い。なお、壁石と壁石の間には、小振りの川原石で間詰めされている。

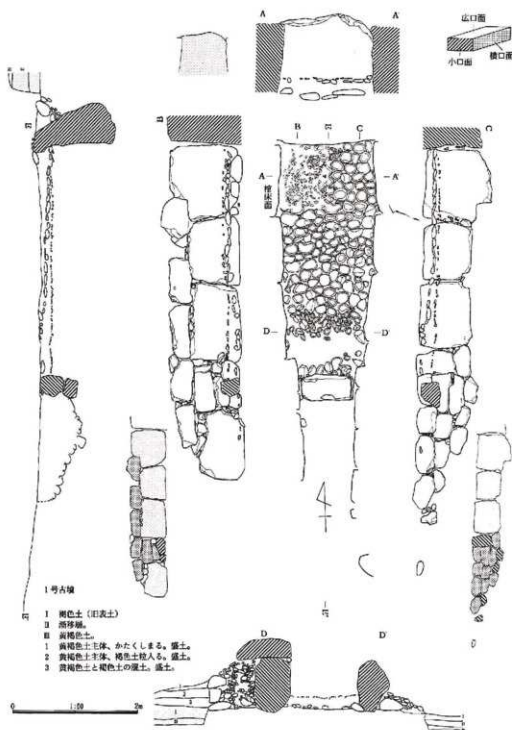
壁石の加工は石室に向く面と、隣石と接する側部に限られ、裏側は自然面のままである。なお、玄室部の壁の一部には切り組みの手法も見られる。加工にはノミが使われ、玄室の側壁にその跡がよく残っている。

石室の裏ごめは5cmから20cmの川原石が使われている。その外側は30cmから40cm大の石を組んで裏ごめ被覆とし、裏ごめ被覆の外側には堅くしまった盛土が部分的に残っている。石室内の遺物は玄室の小礫面上が主であるが、床面の小礫を少し取り除いた時にも出土している。

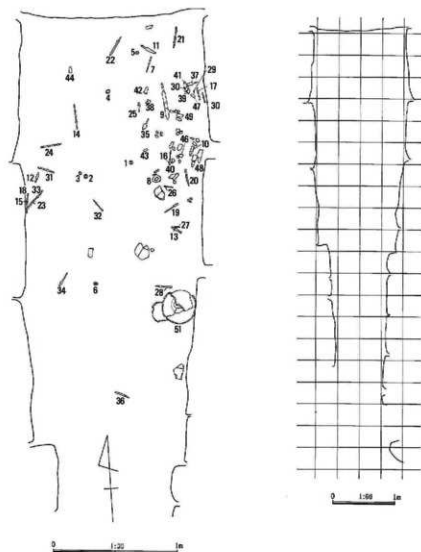
石室プランは35cm近似の尺度の使用が考えられる。石室20尺、玄室10尺、幅4尺となる。



第4图 1号墳全体图



第5図 1号墳主体部



第6図 1号墳石室内遺物出土状況

出土遺物

石室内（第7～9図）

玄室部にはさらさらした自然堆積の黒色土が厚く覆っていた。この土の下から耳環や刀子などが出土している。床面と考えられる小礫層上面のものが大部分だが、Na1、2、3、6、16、17、19、29、30、32、48、50 は小礫を除去作業時に出土している。羨道での出土遺物はない。

耳環 耳環は金環（1～5）と鉄環（6）とがある。Na1 は金銅製で金の残りがかなりよい。外径は3.2cm×2.8cmでやや楕円形である。Na2 は大きさがほぼ同じで、Na1 と対になると思われる。Na3 は外径2.9cm×2.6cm、Na4 は2.5cm×2.3cmである。Na3 とNa4 は対と考えてよいであろう。Na5 は大きさが2cmあまりで細い。これに対になるものはない。Na6 は鉄製の耳環である。外径3.2cm×2.9cmを測る。錆がいちじくしい。これに対になるような耳環は出土していない。

針（7） 鉄製の針で上部に1.5mmの孔がある。長さは12.8cmで先のほうがねじれ、先端部はとがっている。

鐙（8） 直刀のつばである。すかしはなく、倒卵形無窓鐙である。たて6.2cmよこ5.3cm。

小刀（9） 全長30.2cm、刃の幅は2.2cm、両面で平造りである。先端部には上面にも3cmの長さで刃をもつ。基部には目釘が残っている。

直刀（10） 残っているのは茎の端部だけである。直径5mmの目釘穴がみられる。

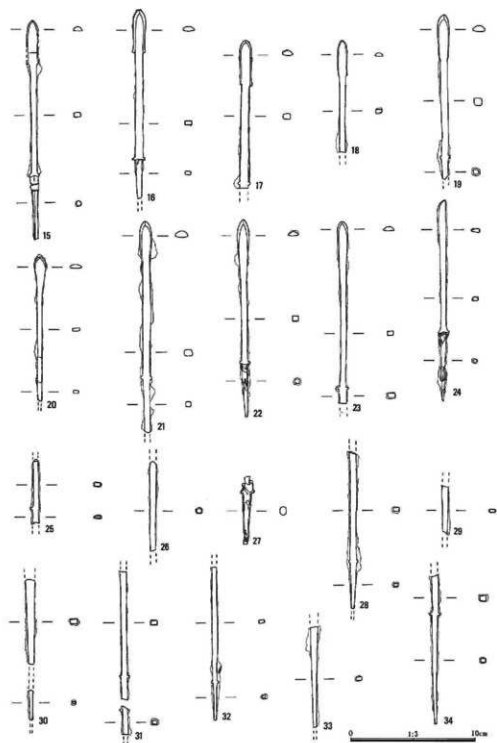
刀子（11～12） Na11は完形である。全長12.9cm、刃の長さ8.6cm。両面、平造りで基部には目釘が残っている。茎には柄の木質が少し残存している。刃は研ぎ減ったためかすこし細くなっている。Na12の刀子は茎の端がなくなっている。刃の長さは4.1cm、平造り、両面である。

鉄鏃（13～44） 22本の鉄鏃が出土した。有茎（13～37）と無茎（38～44）とにわけられる。有茎系

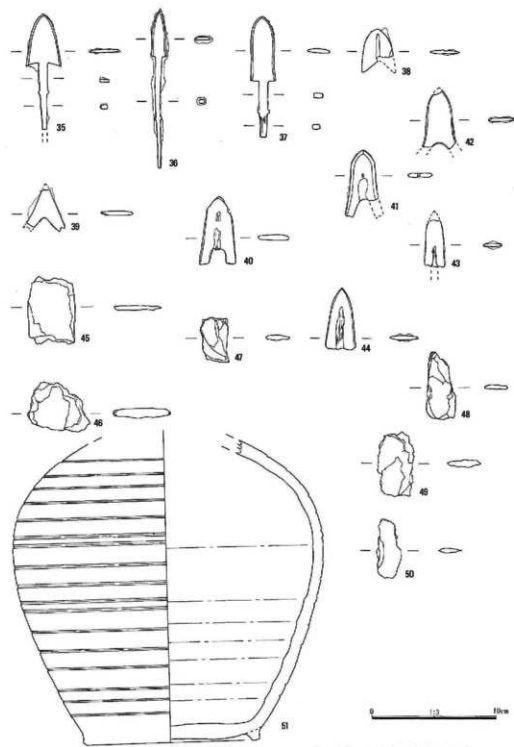
有茎鏃被櫛葉式（13～19）

鏃の刃にあたる身部は片丸造りで、刃は柳葉状にゆるやかにカーブを描く。鏃身部長2.9cm～3.6cm、鏃被部はやや長く7.9cmから10.9cm、断面は長方形で基部との境に棘とよばれる突起

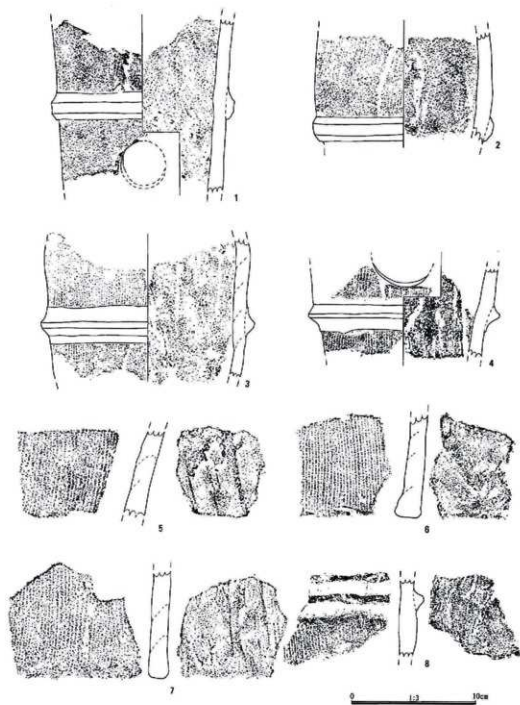
— 13 —



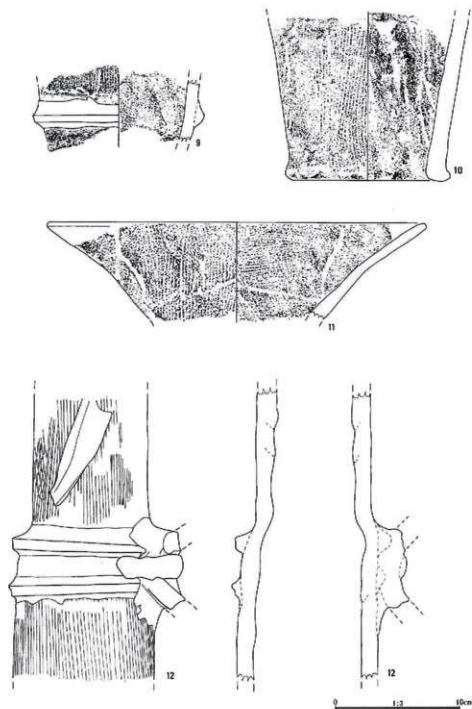
第8图 1号填石室内遺物図



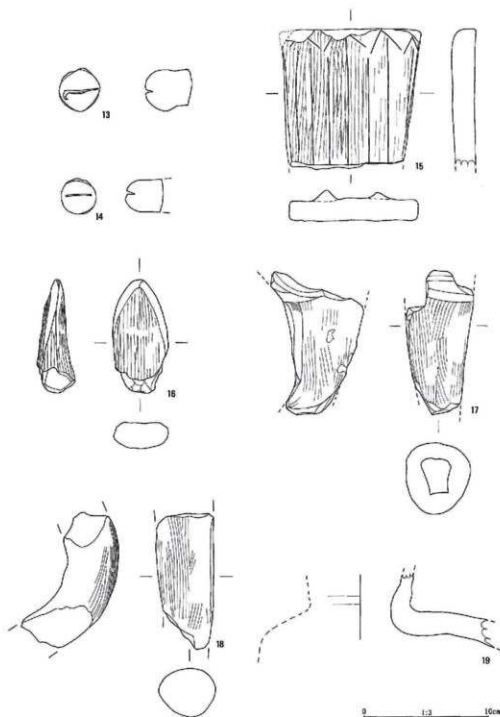
第9图 1号填石室内遺物図



第10图 1号墳遺物図



第11图 1号墳遺物図



第12図 1号墳遺物図

2. 2号墳

2号墳は3区南端に位置する。発掘前はやや小高く畑地となっていた。東側は民家で西側は現在の道路下になる。この場所は古墳の可能性が高く、また東に接する民家の方がこの地点で埴輪を採集されたことから最初に東西にトレンチを入れた。その結果、旧表土と思われる黒色土と上面に地山部分にある黄褐色土と黒色土を交互に盛った土層が確認できた。これは、古墳の盛土と考えられたため調査区を広げた。

主体部はかなり以前に壊されたようで、石室の石は残っていない。しかし横穴式石室を築く時の地盤石（第14図スクリーン・トーンの部分、第13図長方形に石が集中する部分）が確認できたので石室のおおよその厚みは推定できる。古墳は推定規模径約25m、周堀は北側に巡るが、それ以外は調査区外のため不明である。周堀は墳丘側からみるとはっきり落ち込んでいるが、外側の堀の立ち上がりは明瞭でなく、北方のくぼ地にゆるやかに続く。堀幅5～8mで現在残っている基壇面からは60cmの深さである。周堀付近は地山中に礫が非常に多く、特に堀の立ち上がり部分で顕著である。

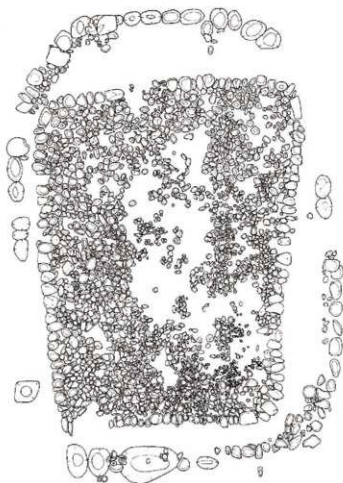
この古墳の北側は1号墳であるがその中間に直径18m深さ60cmほどのくぼ地がある。（第14図）たとえば、2号墳の盛土がほとんど礫を含まない黄褐色土であることから、このくぼ地は2号墳の盛土を採取した跡の可能性が高い。ただし、1号墳、あるいは伊勢塚の盛土の採取地とも解されよう。

2号墳の石室は完全に破壊されていた。主体部のすぐ南に、礫をたくさん含む石室を崩したと思われる土坑が検出された。その中から1号墳の石材に似た未団結凝灰岩の大きな切石の碎片が検出された。切石が壊石なら、2号墳が横穴式石室であった可能性がある。

石室は旧表土の上に地盤石を敷き詰め壁石を置く構築法である。石敷きの範囲は7.6×5.2mであり、この石敷きから40cmから1mの距離を置いて石列がある。石列の配置はやや丸みをおびた長方形であり、また裏ごめとの距離があまりにも近く、これを葺石根石とも場合墳丘の角度が急すぎる感もある。裏ごめ被覆の根石と考えたほうが位置的にはよいが、しかしこの外側に墳丘葺石根石列の検出はないので、どちらとも断定しがたい。（第13図）

基壇は盛土されている。北方に1号墳に似た埴輪の抜け欠と考えられるビットを検出した。ビットは70cmから1m間隔で基壇端部を巡るものと、主体部北を東西に並ぶものがある。これからある程度埴輪の配置は知られる（第14図）。

出土遺物は周堀からの埴輪である（第15図）。No.1～6は普通円筒、No.7は人物埴輪の裾の部分である。円筒埴輪は一次タテハケのみ、No.2のように透孔は円形である。突帯はややくずれて低くなっている。焼成は良好であり、やや黄色みを帯びた茶褐色を呈す。



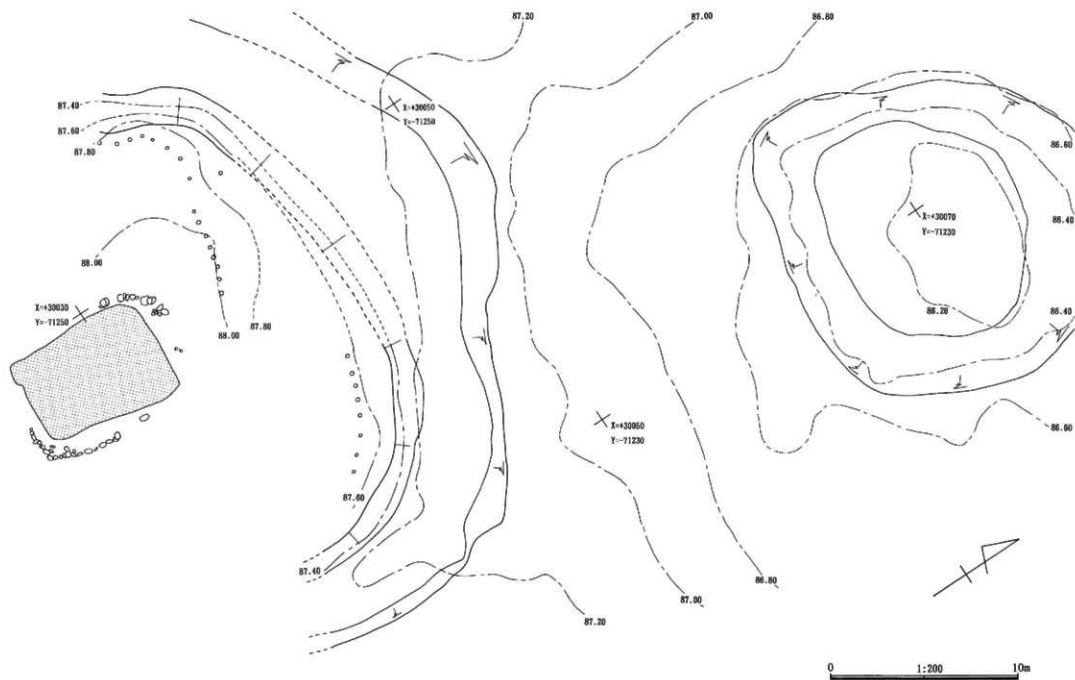
- | | |
|-----------------|--------------------------|
| Ⅰ 褐色土、面表土。 | 6 黄褐色土主体、褐色土粒入る。 |
| Ⅱ 崩移層。 | 7 褐色土主体。 |
| 1 表土。 | 8 黄褐色土を主体とする。褐色土粒入る。 |
| 2 黄褐色土を主体とする礫土。 | 9 褐色土主体。少し黄褐色土が入る。 |
| 3 褐色土と黄褐色土の混土。 | 10 黄褐色土を主体とする。少量の褐色土が入る。 |
| 4 黄褐色土を主体とする礫土。 | 11 黄褐色土ブロックと褐色土ブロックの混土。 |
| 5 覆瓦土。 | 12 褐色土主体。微量の黄褐色土が入る。 |
| | 13 褐色土主体。少量の黄褐色土が入る。 |

礫石の埋み盛り穴

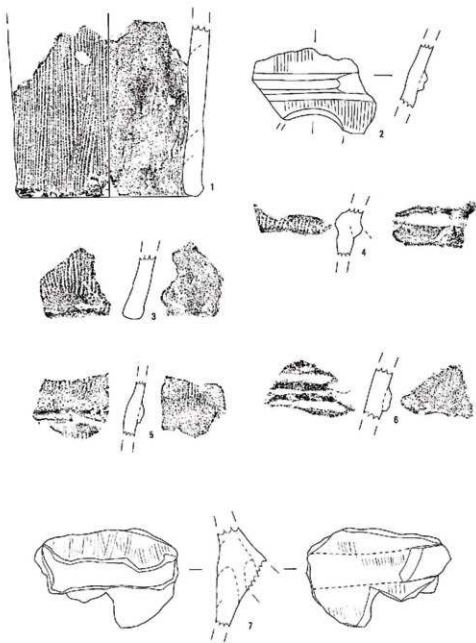
礫石の埋み盛り穴

A. 1-22. 18

第13図 2号墳主体部



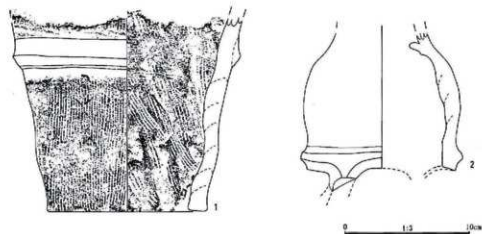
第14图 2号填全体图



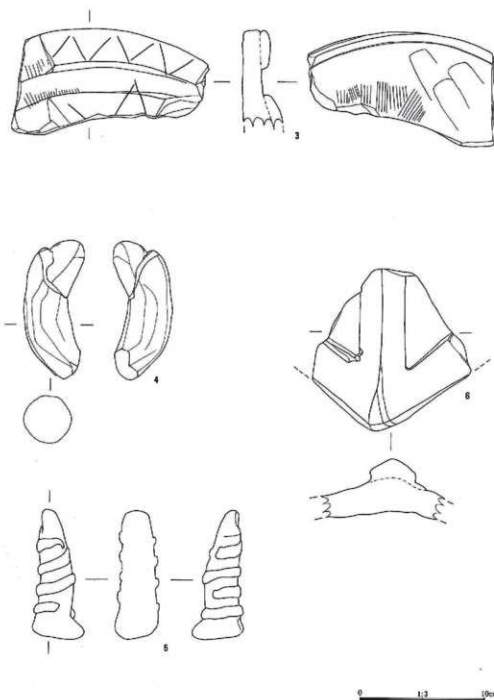
第15图 2号墳遺物図

第16図から第18図までは古墳の東に隣接する家の方が、2号古墳の墳頂あたりで偶然採集された埴輪である。これらは、2号墳の埴輪であった可能性が高いが断定はできない。

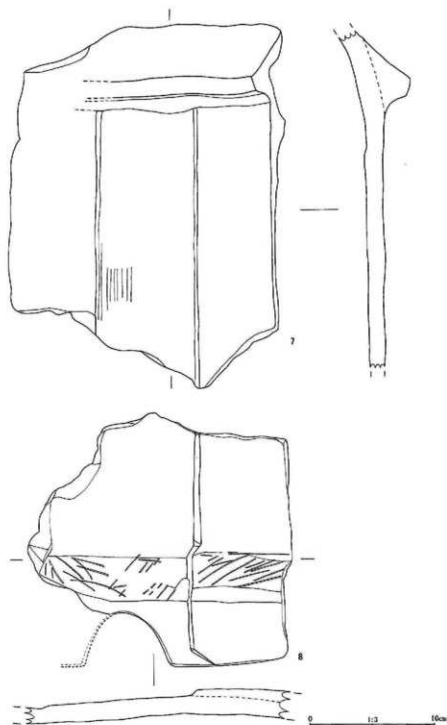
1は円筒埴輪である。茶褐色を呈し、2～3mmの小礫を含んだきめの細かい胎土である。外面は一次タテハケ、内面はユビナデとハケ調整の跡がよく残っている。2は朝顔形埴輪である。円形の透孔がみられる。胎土がかなり軟らかく、外面は摩滅している。3は櫛をかたどった埴輪であろう。焼成はかなりよく、かたく焼きしまっている。4と5は人物埴輪の破片である。4は腕の部分であり、5は美豆良と考えられる。4と5の胎土は茶褐色を呈し、かたい焼きである。6から8までは家形埴輪の破片である。6は切妻の屋根の先端部と考えられる。7は家の壁の部分である。壁の間にある太いたて方向の帯は柱の表現であろう。上部には斜め方向の軒が表現されている。8は家の壁と土台の部分である。下部に半円形の切り込みが入っている。切り込みの上部には、横方向の突帯があったと見られるが欠損している。この部分には、ヘラ先でつけた斜めの細かい線がある。粘土を付着しやすくするためと思われる。6から8までの家形埴輪の胎土は黄褐色を呈し、粘土の粒子が非常に粗く、また小さな小礫をたくさん含んでいる。6から8までの家形埴輪の焼成は、比較的低火度でなされたと思われる。また、焼きも少し悪い。なお、黒斑はなく均一の焼きなので、窯で焼かれたものではあろう。隣家の方の採集埴輪のうち、家形埴輪のつくりが他の埴輪と全く違うのは焼成法や粘土採掘層の差と見ることができ、採集遺物であり即断はできない。



第16図 伝2号埴輪遺物図



第17図 伝2号埴輪遺物図



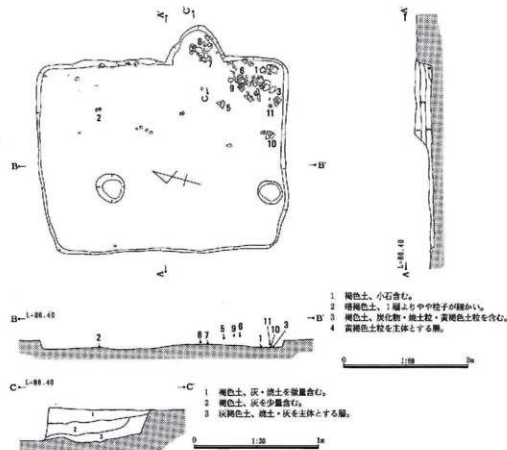
第18図 伝2号墳遺物図

第4節 集落の調査

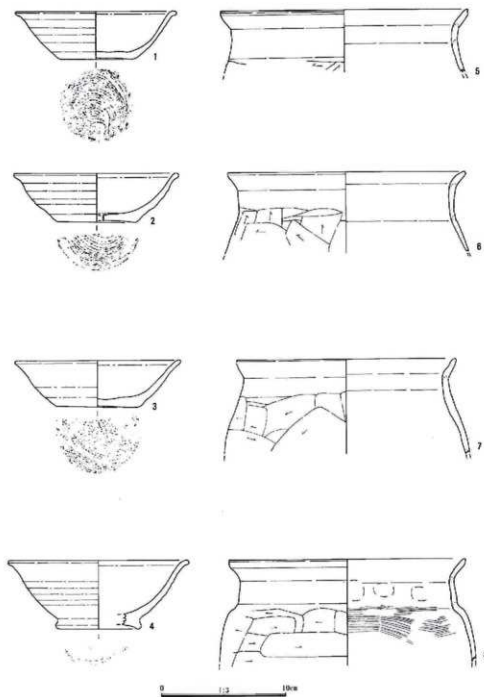
1. 住居跡

1号住居跡

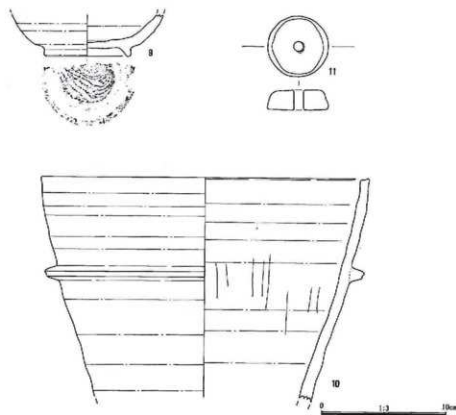
1区で検出した。2、3、6号住居が東側にある。他の住居との重複はないが、ピット群が1号住居を切る。規模は東西3.15m、南北4.05m、深さ25cmである。竈に対する住居の軸は、北16度西である。住居は南東に竈を持ち、形態はやや隅丸な長方形である。竈は軸0.95cm、奥行き0.55mで軸はない。竈の覆土の最下層には、灰や焼土粒が認められる。貯蔵穴、柱穴はない。住居の覆土は暗褐色の粒子の均一な土で、自然堆積土と考えられる。遺物は竈内及び住居南東部に集中して出土している。図のうち1、2、3の須恵器環と、10の須恵器瓶は床面上である。遺物は他に須恵器碗、土師器甕、紡錘車などがある。



第19図 1号住居跡図



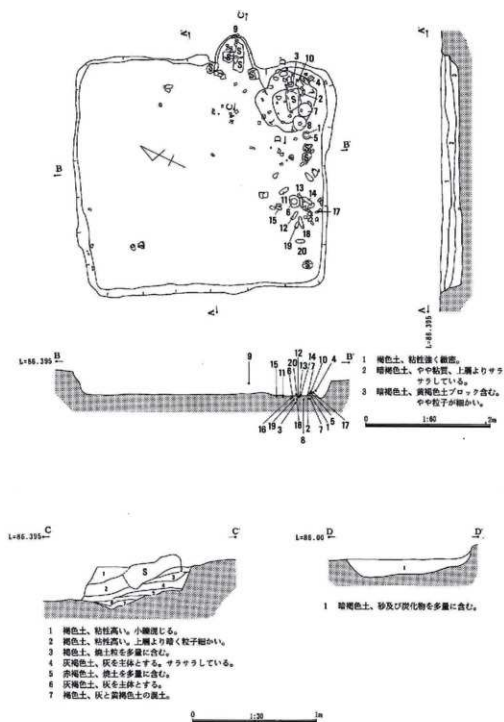
第20図 1号住居跡遺物図



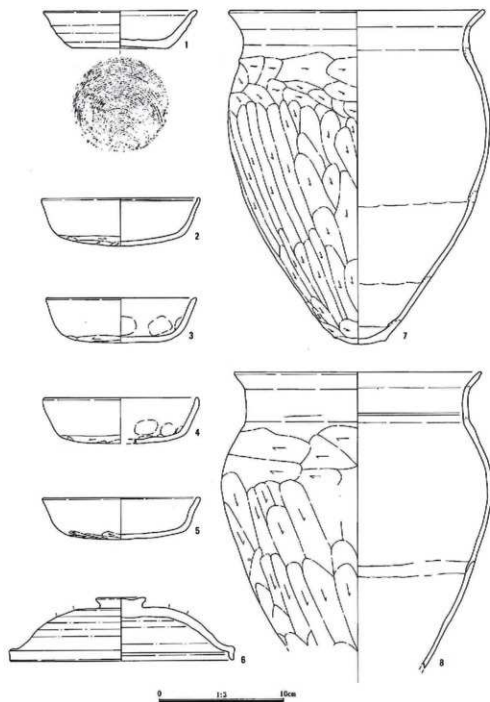
第21図 1号住居跡遺物図

2号住居跡

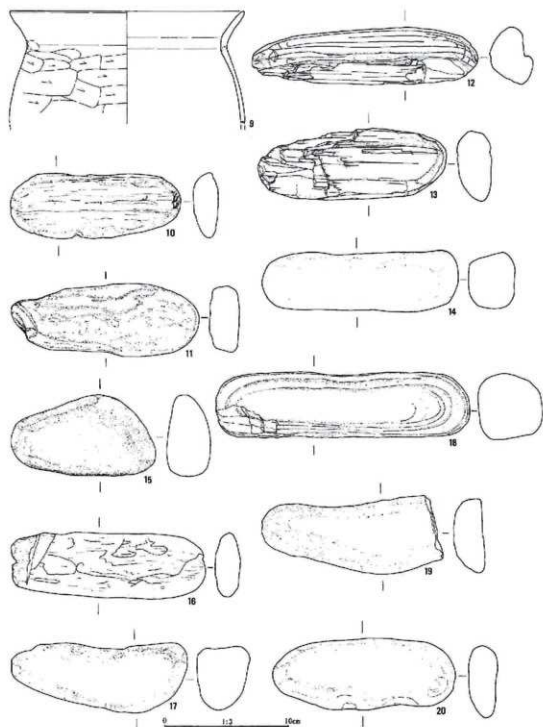
1区の中央付近で検出した。北には3、4号住居、南には6号住居がある。他の遺構との重複はない。規模は東西が3.85m、南北4.2m、深さ35cmである。住居形態はやや隅丸な長方形で、北30度西を主軸とする。竈は住居南東に造られている。袖は砂岩の切石で、まぐさ石も砂岩製であったと見え、竈の中に切石が落ち込んでいる。竈の幅は55cm、奥行き55cm、煙道は検出出来なかった。竈の覆土は焼土、炭化物を含み壁はよく焼けている。貯蔵穴は竈の南側、住居南東隅にある。ややいびつな円形で1.05m×1.0m、深さは30cmを測る。覆土は暗褐色の粒子の均一な土で、住居とともに埋没した土と考えられる。床面はフラットで、竈前はやや踏み固められている。柱穴は検出されなかった。住居の覆土は最下層は黄褐色土のブロックを含むが、その上層は暗褐色の粒子の均一な土で、自然堆積土と考えられる。遺物は竈及び貯蔵穴周辺、また南西部でも出土している。図の7、8は貯蔵穴内で口縁を下にして出土した。また10から20までの磨礪み石は、住居南部やや西寄りに固まるようにして床面上で出土している。



第22図 2号住居跡図

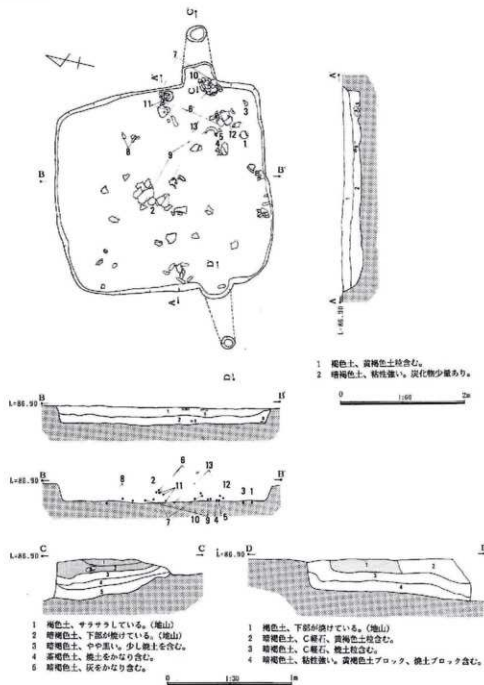


第23図 2号住居跡遺物図



第24図 2号住居跡遺物図

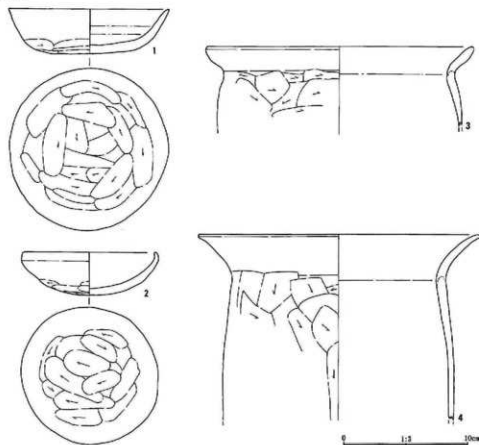
7号住居跡



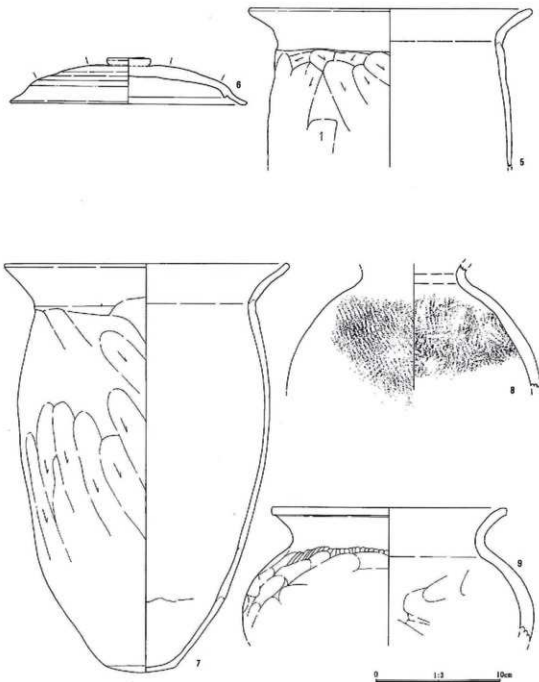
第25図 7号住居跡図

7 号住居跡

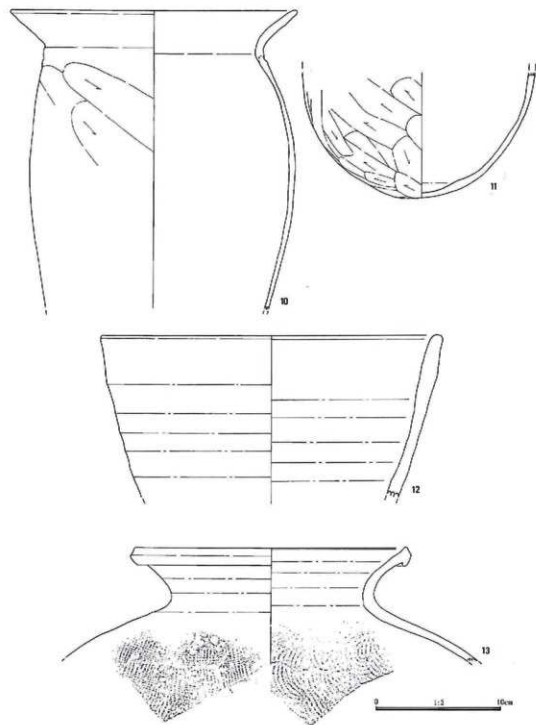
2区の東部で検出した。規模は東西3.2m、南北3.45mの規模で、深さは25cmである。平面形態は幾何学丸方形で、北2延西を主軸とする。竈は住居の南東及び南西と2基ある。2基の竈とも煙道上の天井部が残っている。東の竈の規模は幅45cm、煙道まで含めた奥行きは1.0mである。竈の底面は燃焼部から煙道までゆるやかに上っていく。西の竈は幅55cm、煙道まで含めた奥行きは1.15mである。燃焼部から穹と上らないうで煙道が続き、先端部で煙道が直角に近く上を向き、煙出しの穴へと続く。両方の竈とも袖はない。両方の竈とも、竈内はよく焼けている。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。床面はやや凹凸があり、壁は幾分斜めに立ち上がる。遺物の内、図の1から5までは、比較的床面近くの出土である。それ以外は産廃遺物が多いと考えられる。1は底面手持ち箆削りの須恵器環、6は蓋、8、9、13は蓋である。12は口口整形の須恵器鉢である。土師器は2の半球形の環、それ以外は甕である。11の甕は九底である。



第26图 7号住居跡遺物図

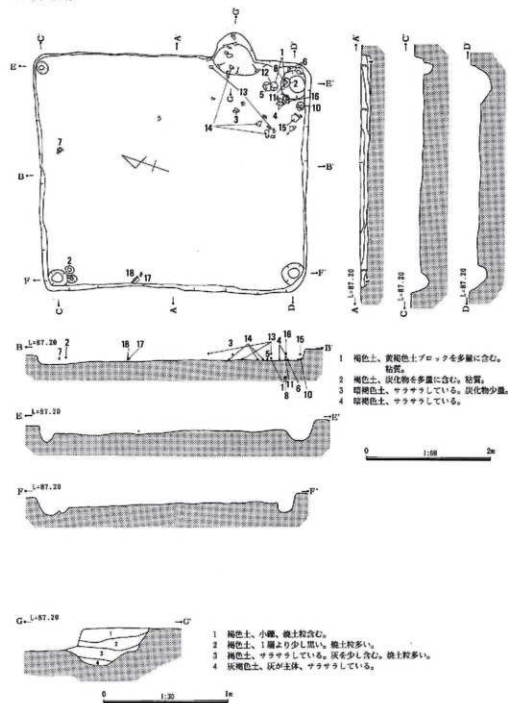


第27图 7号住居跡遺物図



第28図 7号住居跡遺物図

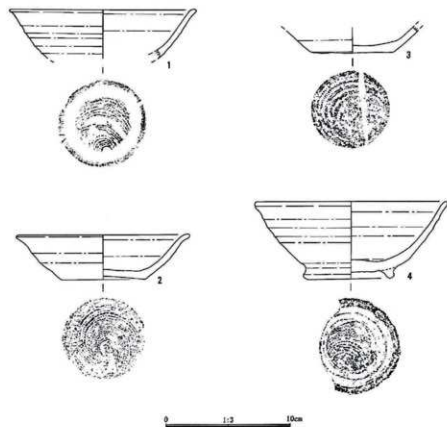
16号住居跡



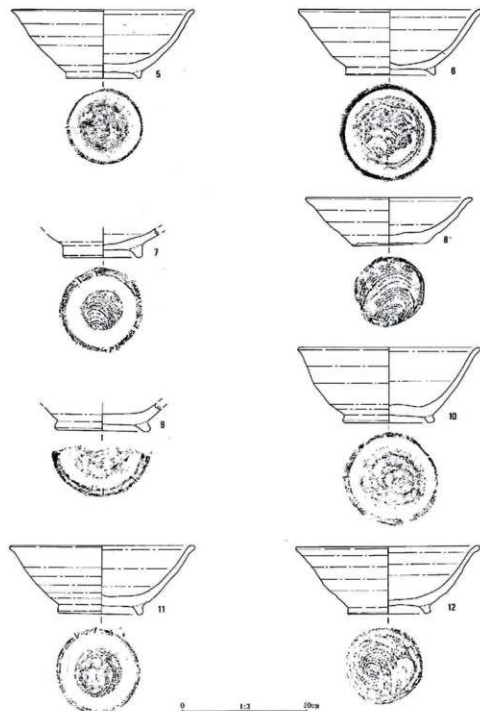
第29図 16号住居跡図

16号住居跡

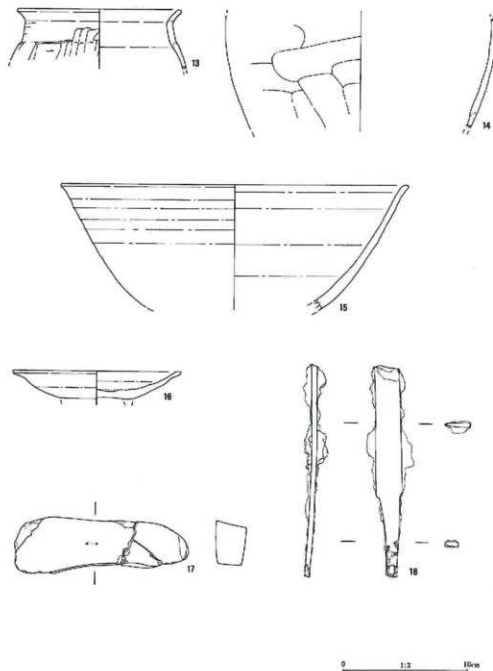
2区で検出した。1号古墳の北、18号住居の東となる。他の住居跡との重複はない。規模は東西3.2m、南北4.45m、深さ15cmである。平面形態はかなり整然とした隅が若干丸い長方形である。また、住居の軸は北17度西となる。柱穴は4本検出した。位置は、住居の各々のすみにあたる所である。柱穴の直径は18cmから45cm、深さ15cmから20cm程度である。竈は南東の隅に造られている。袖はなく、住居外に張り出した竈の規模は、幅70cm、奥行き45cmで、煙道は削平されたのか、検出できなかった。竈内部は下層に灰、その上は焼土粒子を含む層であり、竈の壁はやや焼けている。なお、貯蔵穴と周囲は確認できなかった。住居の覆土は上層がやや砂質の土、下層が粘性をもち炭化物を含む層である。遺物は竈前及び竈の南部分からの物が多い。出土位置は4、13～16以外は比較的床面に近い。土器は須恵器坏と埴が中心であるが、住居西隅では、砥石と刀子が出土している。



第30図 16号住居跡遺物図



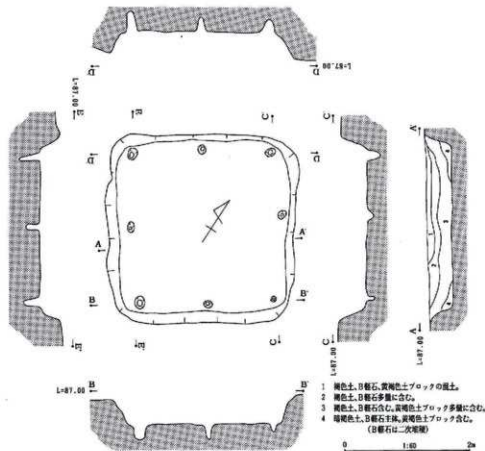
第31図 16号住居跡遺物図



第32図 16号住居跡遺物図

17号住居跡

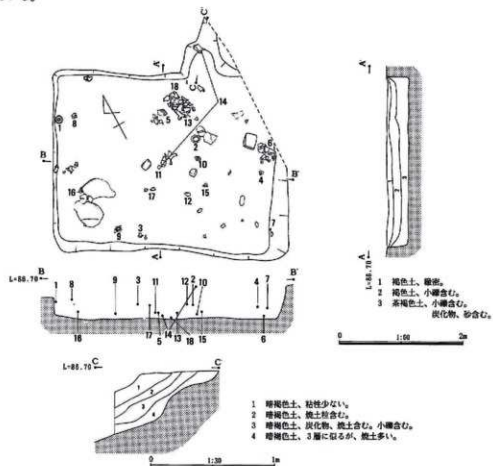
2区で検出した。1号古墳の東であり、古墳の周堀端部と切り合う。古墳の周堀が埋没した後の遺構である。規模は東西3.1m、南北3.0mの隅丸正方形を呈する。向きは、北35度西に軸をとる。床面までの深さは、確認面から35cmとやや深い。壁は60度から70度とやや斜めである。竈、炉等の施設は検出されなかった。柱穴は8本検出した。位置は4隅とその中央とである。柱穴の大きさは直径20～25cm、深さ10～30cm程度で、底に行くにつれ細くなる傾向にある。床面はほぼ平らであり、やや踏み固められている。覆土は、ロームブロックと浅間B軽石の二次堆積物を多量に含む土である。地層セクションから自然に埋没した様子が推定できる。出土遺物はなく、時期を特定することは困難であるが、B軽石降下の1108年よりは少なくとも新しい。住居跡とする積極的根拠もない。しかし、柱穴の配置からは竪穴住居のような上屋が推定され、住居跡の可能性が強い。



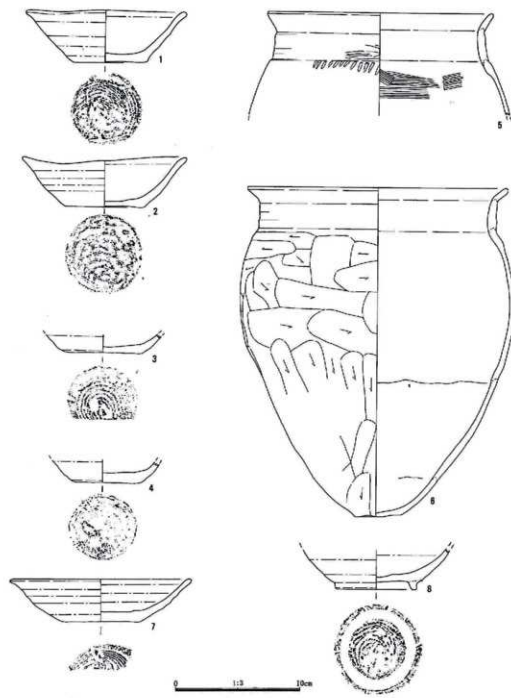
第33図 17号住居跡図

22号住居跡

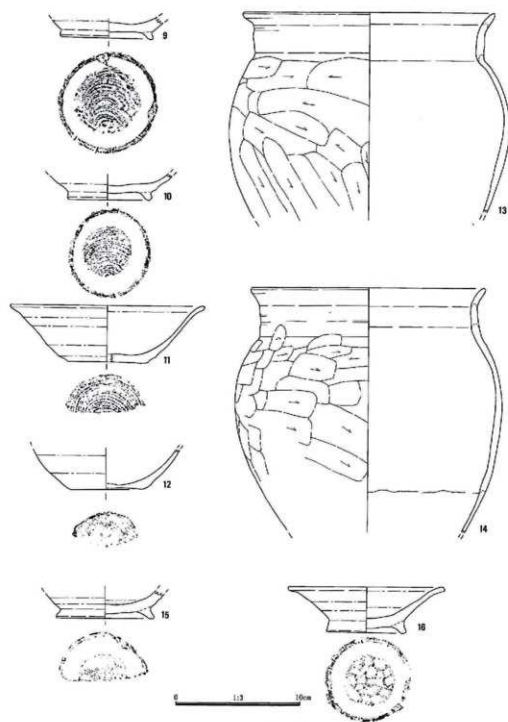
2区で検出した。1号古墳の西の位置であり、19号住居と重複関係にある。なお、22号住居は19号住居よりも新しい。規模は東西2.9m、南北3.8m、深さは55cmである。平面は長方形であり、竈に直行する軸は、北32度西である。竈は住居の南東に造られている。袖はなく、竈の幅70cm、奥行き55cmを測る。煙道は40cm程確認できるが、その先は調査区外のため不明である。竈内は焼土粒や炭化物が多く、壁もよく焼けている。貯蔵穴の有無は不明であり、柱穴も検出されなかった。住居の覆土下層は小礫を含む褐色土、上層は緻密で粘性の高い土である。ともに自然堆積土と考えられる。遺物は住居全体から出土している。18の台付甕は床面にかかなり近い位置であるが、殆どの土器は住居が埋没していく過程での廃棄遺物と考えられる。出土した土器は須恵器坏・埴、土師器甕、土師器小型台付甕などがある。また、20、21の土師も出土している。



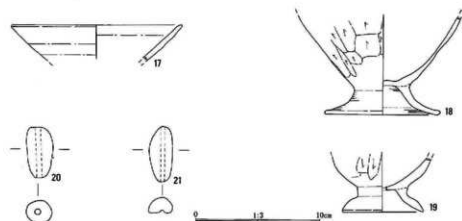
第34図 22号住居跡図



第35図 22号住居跡遺物図



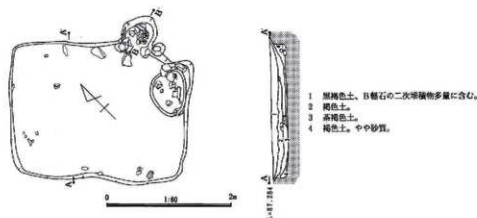
第36図 22号住居跡遺物図



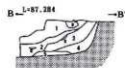
第37図 22号住居跡遺物図

24号住居跡

4区で検出した。33号住居の北に位置する。また、27号住居と切り合い、27号住居よりも新しい。規模は東西2.2m、南北2.85m、深さ25cmである。住居の平面形態はややゆがんだ長方形であり、主軸は北51度西にとる。竈は安山岩の転石を軸としている。幅45cm、奥行き65cmである。煙道は残存していない。竈の内部は焼土ブロック、炭化物、灰が多く壁もよく焼けている。貯蔵穴は竈の南にある。平面が楕円形で、壁に近い部分は直線的である。規模は、長さ80cm、幅55cm、深さ10cmである。柱穴は検出されなかった。住居の覆土は、下層が褐色土で最上層にはB転石の二次堆積物を多量に含む。遺物は竈内及び貯蔵穴周辺が多い。土器は須恵器環・埴・羽釜、灰釉陶器埴がある。また、磨礪み石が2点出土している。須恵器埴は体部が厚手で、口径が小さい。つくりも粗雑化している。羽釜の胴部がわかるものは、ヘラケズリ調整が認められる。灰釉陶器は軸が内外張り掛け、高台は形が崩れ底面は糸切り離しのままである。



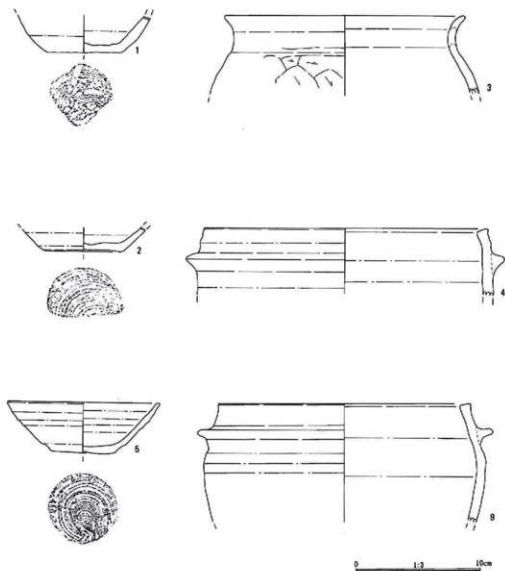
第38図 24号住居跡図



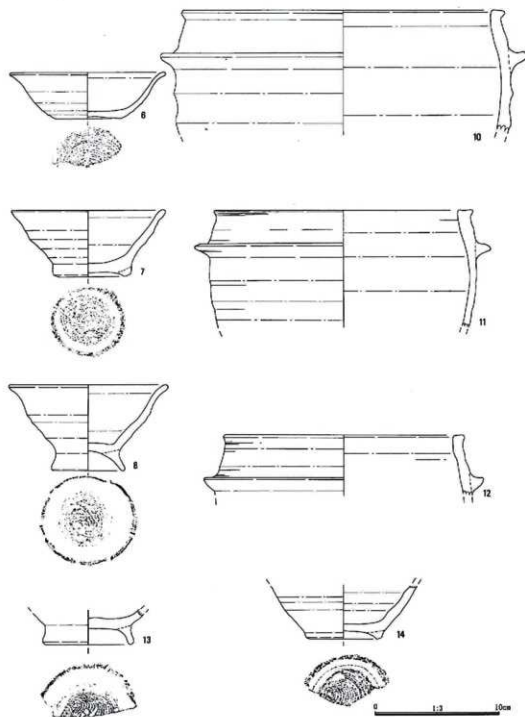
- 1 褐色土、少量の焼土を含む。
- 2 褐色土、灰を含む。
- 3 褐色土、少量の焼土を含む。
- 4 褐色土、焼土多く含む。
- 5 褐色土、焼土ブロック状とする。

0 1.00m

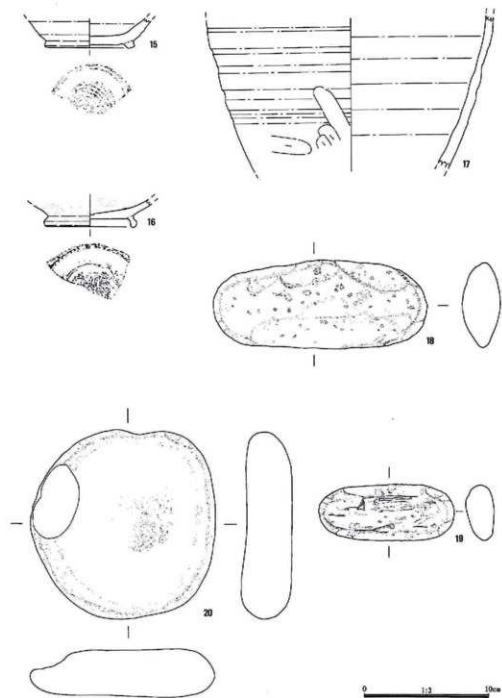
第39図 24号住居跡電線セクション図



第40図 24号住居跡遺物図



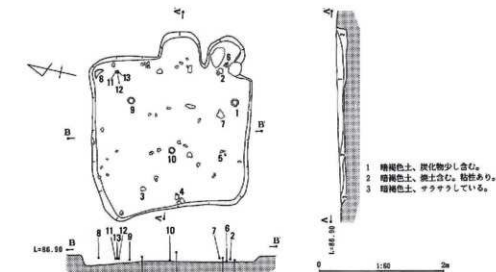
第41図 24号住居跡遺物図



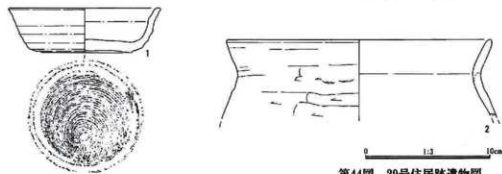
第42図 24号住居跡遺物図

29号住居跡

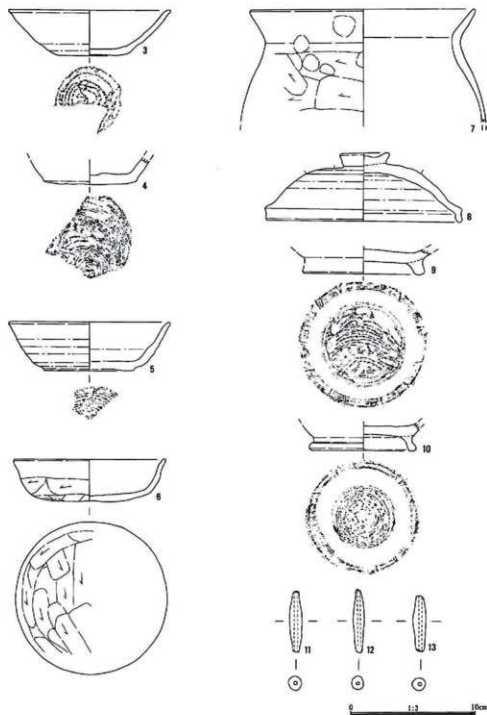
6区で検出した。28号、41号住居跡の東となる。また、北東には長方形の10号土坑がある。他の遺構との重複はない。規模は東西2.65m、南北2.5m、深さ18cmである。平面形態は北の幅が広くゆがんだ方形である。竈に直行する住居の軸は北19度西である。竈は東壁の中央付近に1基、それに並んで南東隅に1基と、合計2基造られている。北の竈は平面が台形で、幅75cm、奥行き48cmである。また、南の竈はゆがんだ楕円形で、幅50cm、奥行き60cmである。南の竈の袖近くには河原石が検出された。南の石は24cm×20cm×7cmの安山岩で袖の位置にある。北の石は32cm×20cm×8cmの大きさの安山岩で、竈中から検出された。両者とも袖の補強用の石と考えられる。竈内部の覆土には両方とも幾分焼土粒、炭化物、灰が含まれている。壁は北、南ともあまり焼けていない。住居の覆土は暗褐色土であり、自然埋没の状況である。遺物は住居全面から出土している。その出土層位は中、上層が多く廃棄されたものが多いと考えられる。



第43図 29号住居跡図



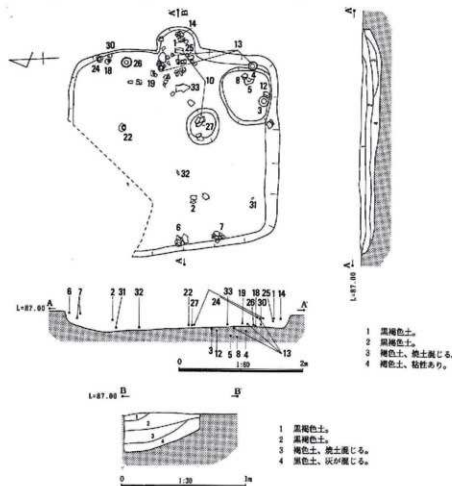
第44図 29号住居跡遺物図



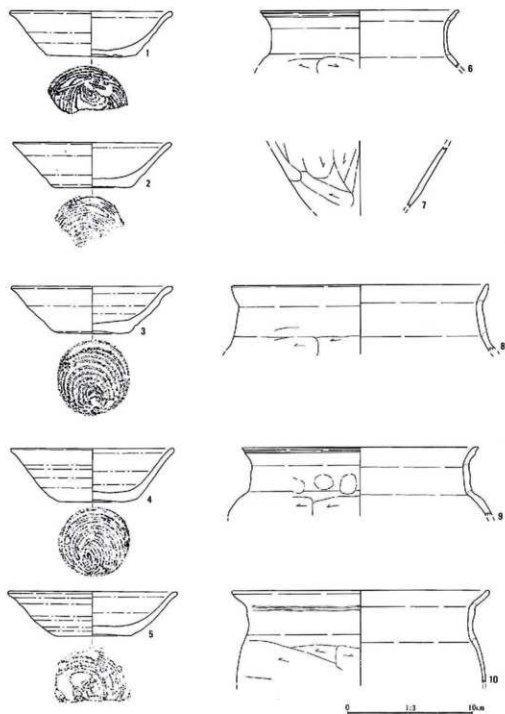
第45図 29号住居跡遺物図

30号住居跡

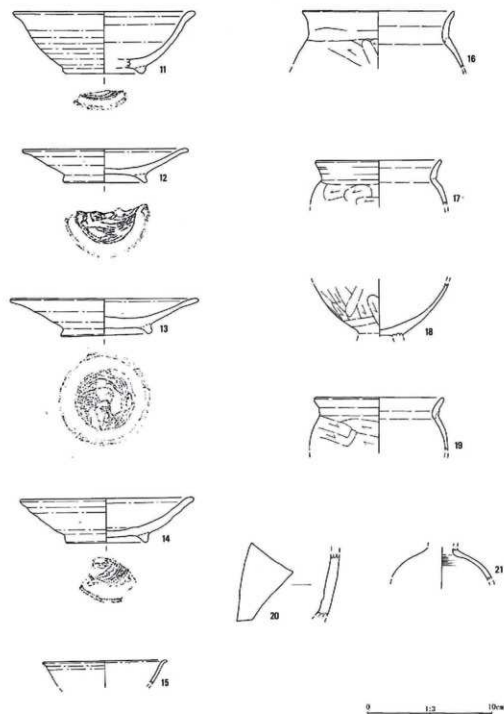
6区の北端で検出した。他の住居との重複はない。規模は東西3.3m、南北3.4m、深さ25cmを測る。平面はやや北が広い台形で、住居の主軸は北3度東にとる。住居の床面は中央がやや高く、壁際はやや低い。また住居の壁は75~80度とややゆるやかである。竈は東壁の中央付近にある。袖はなく、幅72cm、奥行き40cmで、奥の部分では壁は垂直に近く立ち上がる。なお、煙道は検出できなかった。竈内の覆土には焼土粒、灰がかなり含むが、壁はあまり焼けていない。貯蔵穴は南東隅にある。隅丸の台形で、規模は95cm×80cm、深さ15cm程度である。なお、柱穴は検出されなかった。住居の上層が黒褐色土、下層が褐色土で全体に自然埋没である。遺物は竈前、貯蔵穴中に多い。貯蔵穴からは3~5の須恵器環、8の土師器甕、12の高台付き皿が出土しているが、貯蔵穴の底面にはついていない。他の遺物も床面からやや上の出土である。



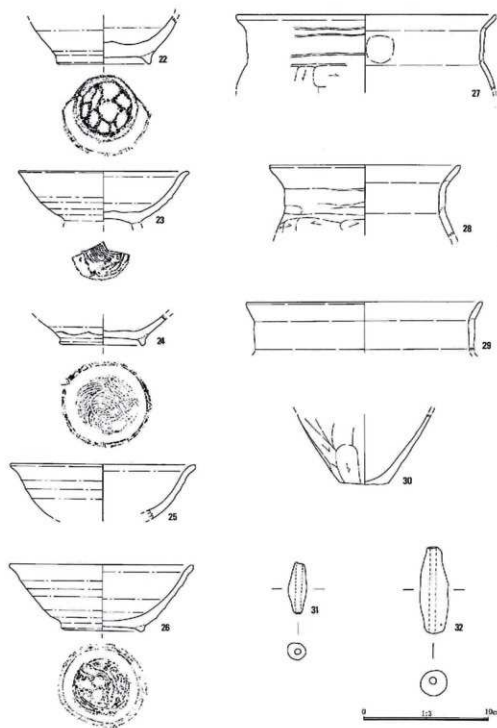
第46図 30号住居跡図



第47图 30号住居跡遺物図



第48图 30号住居跡遺物図



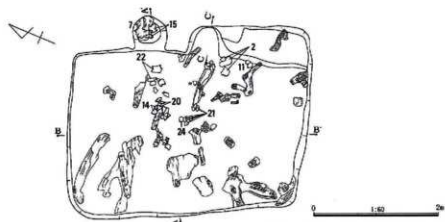
第49図 30号住居跡遺物図



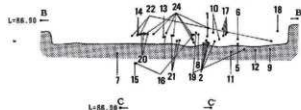
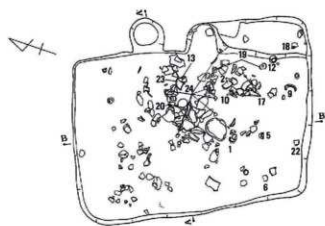
第50図 30号住居跡遺物図

35号住居跡

6区で検出した。48号住居の西の位置である。49号住居と切り合い、49号住居よりも新しい。住居の規模は東西2.9m、南北3.9m、深さ45cmである。平面形はややいびつな長方形で、住居の主軸は北18度西にとる。住居の壁は80~85度と比較的垂直に近い。床面は中央が高く東西がやや低い。また住居南部はやや凹凸がある。竈は東壁の中央やや北寄りの位置と、その南とに合計2基ある。北の竈は幅53cm、奥行き50cmで底は窪み、奥の壁は垂直に近く立ち上がる。南の竈は幅70cm、奥行き50cm、竈の底はフラットに近いが、奥は約70度の角度で立ち上がる。竈の覆土は南北とも、焼土粒、灰、炭化物をかなり含む。住居の南東部に棚状の施設がある。幅1.3m、奥行き0.5m、床面からの高さ0.3mで、上面は平らである。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。住居の覆土中には長さ0.6mから1.2m程の炭化材が検出された。住居中央と北部は東西南東方向、南東及び南西では住居の中央に向く傾向にある。炭化材は床面に接する部分もあるが、床面と間に5cm程の間層をもつものが多い。なお、住居の壁はかなり焼けている。遺物は住居全面から出土している。また、20cmから40cm大の河原石が、住居中央に投げ込まれたような状況である。須恵器には坏、埴、壺、甗、鉢、羽釜があり、土師器甕に対して量や器種も多い。



第51図 35号住居跡、炭化材出土状態図

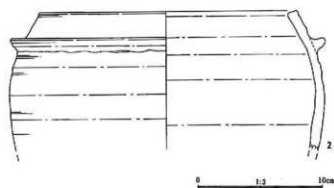
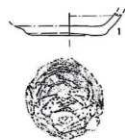


- 1 灰褐色土、炭化物含む。
- 2 灰褐色土、焼土粒、炭化物多い。
- 3 灰褐色土、炭化物多量。
- 4 褐色土、焼土、非常に焼けている。
- 5 暗褐色土、炭化物多い。
- 6 褐色土、焼土、炭化物多い。
- 7 褐色土、石が多い。

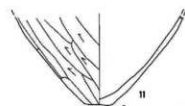
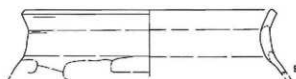
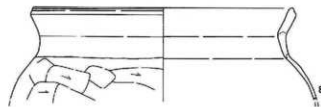
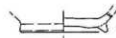
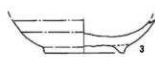
- 1 灰褐色土、焼土粒、炭化物含む。
- 2 灰褐色土。
- 3 灰褐色土、焼土、炭化物、灰が多い。



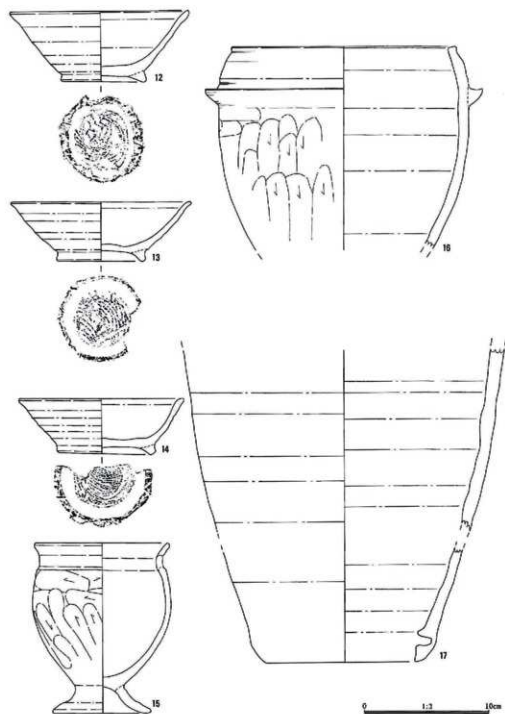
第52図 35号住居跡図



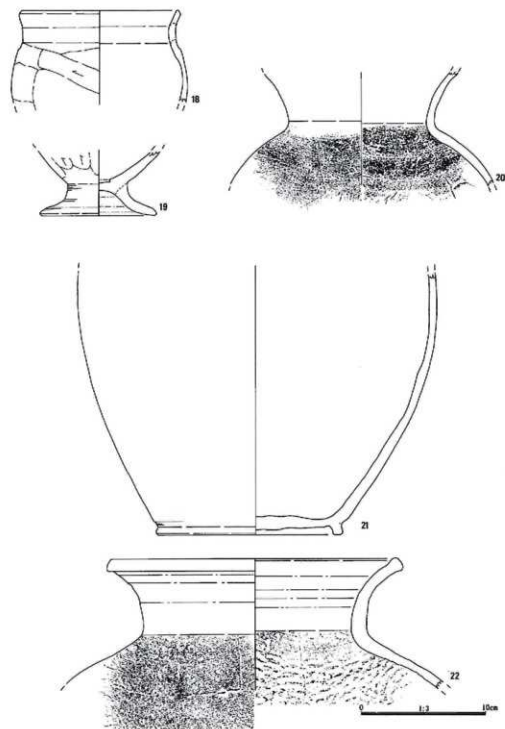
第53図 35号住居跡遺物図



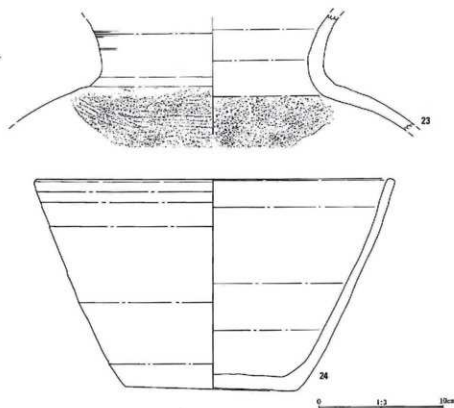
第54図 35号住居跡遺物図



第55图 35号住居跡遺物図



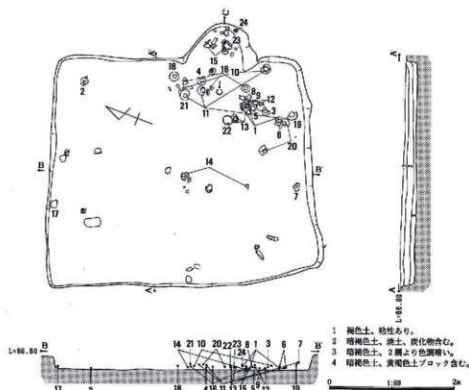
第56图 35号住居跡遺物図



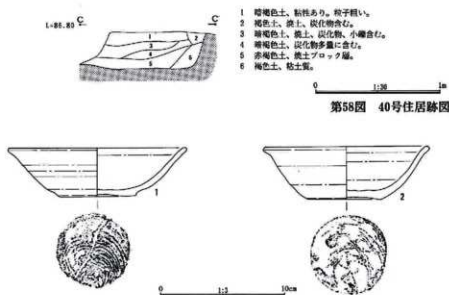
第57図 35号住居跡遺物図

40号住居跡

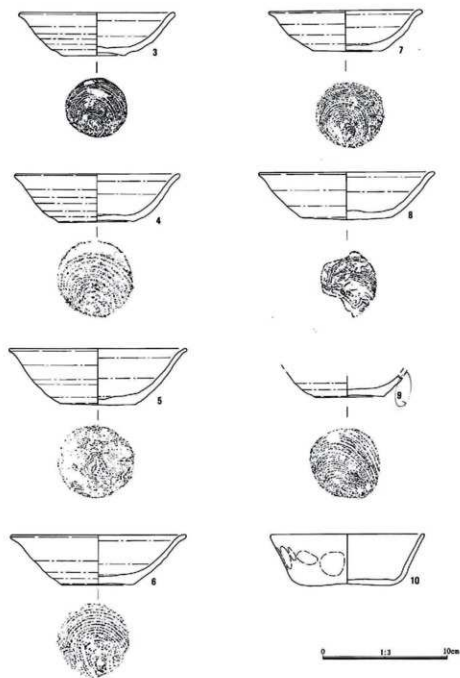
6区で検出した。50号住居と切り合い、50号住居よりも新しい。住居の規模は東西3.7m、南北4.45m、深さ25cmである。住居の平面形態は北辺がやや長い長方形で、主軸は北20度西である。住居の床面はほぼ平らで、あまりかたくなはない。壁は約70度から80度の角度である。竈は住居東の中央やや南にある。袖は北で5cm、南では20cm程住居内に張り出す。竈の幅1.0m奥行き0.75mで竈内の底はわずかにくぼむが、奥では72度の角度で立ち上がる。なお、煙道は検出されなかった。竈内は焼土、炭化物、灰がかなり多く、壁もかなり焼けている。貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。住居の覆土は暗褐色のかなり均一な土で、ゆっくりとした自然堆積が考えられる。遺物は住居全面から出土しているが、竈前が比較的多い。2の須恵器環と17の須恵器壺は比較的床面に近いが、他の物は床面から5cm程度の高さのものが多く、殆ど廃棄遺物と考えられる。須恵器は環、壺、高台付き皿がある。環はやや厚手でやや口唇部が外反し、壺は胴部が直線的になり口唇の外反が弱い。土師器は環と口縁がコの字形の台付甕とがある。



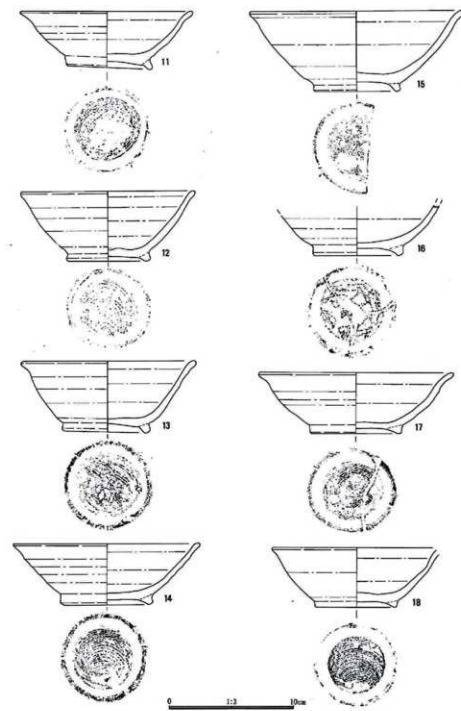
第58図 40号住居跡図



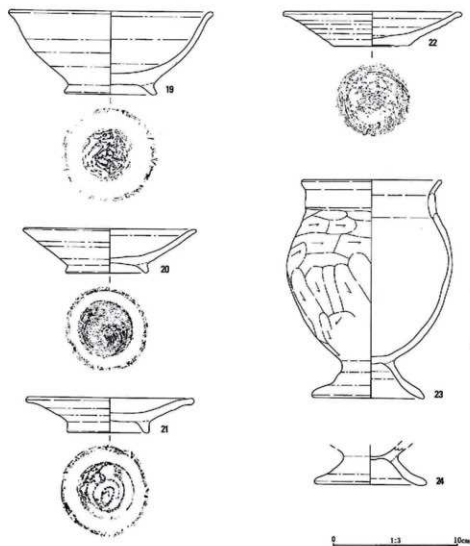
第59図 40号住居跡遺物図



第60图 40号住居跡遺物図



第61图 40号住居跡遺物図

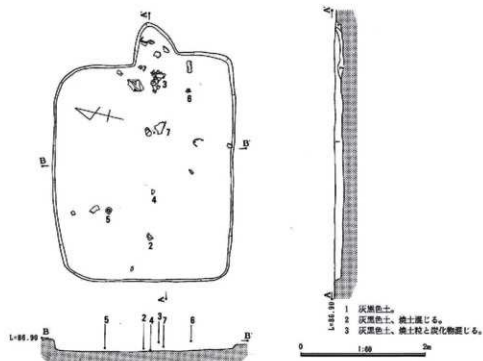


第62図 40号住居跡遺物図

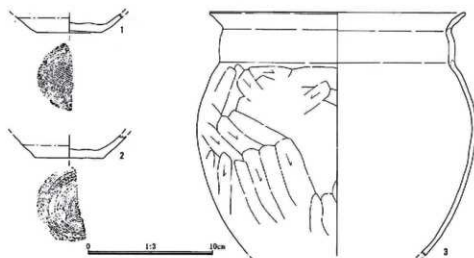
42号住居跡

6区で検出した。34号住居跡、及び17号土坑の西となる。他の遺構との重複はない。規模は東西が3.65m、南北2.9m、深さ15cmである。平面形態は東西に長い長方形で、主軸は北19度西である。住居の床面はやや凹凸があるものの、概ね平坦であり中央部がやや低い。壁は60度～75度とやや斜めな角度である。竈は住居東のほぼ中央にある。幅70cm、奥行き52cm、竈の内部は床面よりわずかに窪む程度であり、奥では60度の角度で立ち上がる。なお、煙道は検出されなかった。竈の覆土には焼土と炭化物がかなり含まれているが、壁はあまり焼けていない。

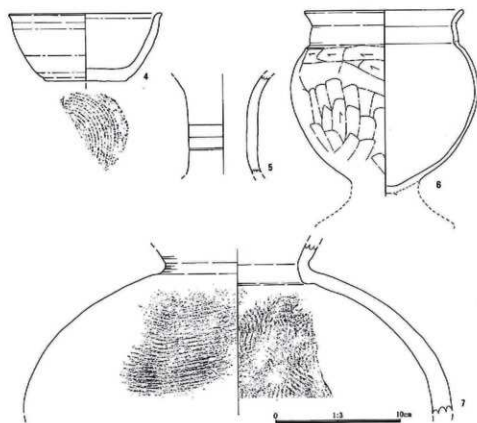
貯蔵穴、柱穴は検出されなかった。住居の覆土はほぼ1層で、短時間の自然堆積と考えられる。遺物は竈前を中心として、住居の全面から出土している。廃棄遺物と考えられる。



第63図 42号住居跡図



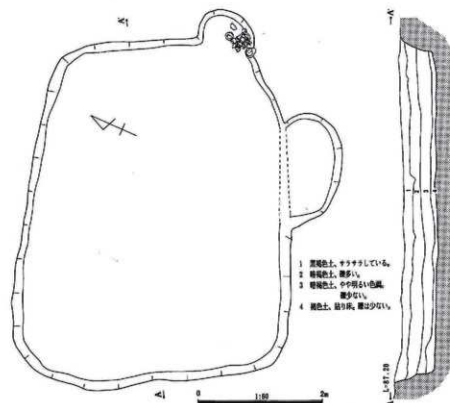
第64図 42号住居跡遺物図



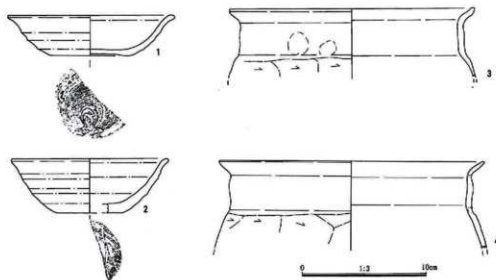
第65図 42号住居跡遺物図

46号住居跡

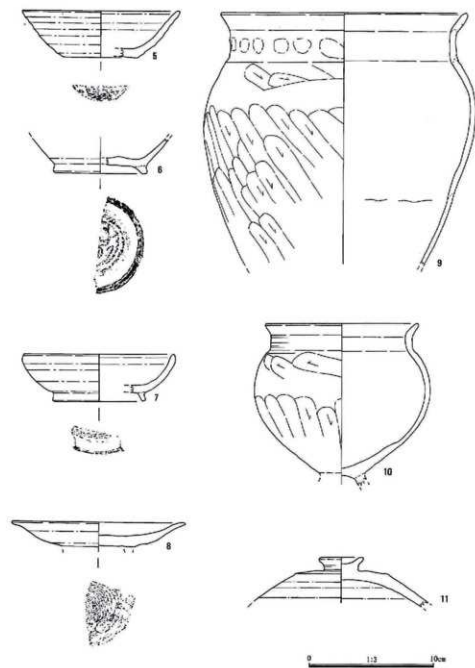
5区の西側で検出した。北には47号住居がある。周囲の地山は礫を主体とする所であり、壁も礫のため非常に崩れやすい。南では土坑と切り合うが、重複関係は不明である。住居の規模は東西5.5m、南北4.5m、深さ55cmである。主軸は北23度西で、住居の平面形はやや丸みを帯びた台形を呈する。住居内は地山の礫層の上に、礫を殆ど含まない褐色土を盛って床面を造っている。壁は70〜75度と比較的垂直に近く立ち上がる。竈は南東隅にある。竈の南袖には河原石を使っている。竈の規模は、幅90cm、奥行き60cmと比較的大型である。なお、煙道は検出されなかった。また、柱穴、貯蔵穴も検出されなかった。住居の覆土最下層は礫の少ない暗褐色土、また、中層には礫が多く壁が崩れ、礫が流れ込んだと考えられる。遺物は須恵器坏・埴・皿・蓋・甕、土師器小型台付甕・甕、土鍋、鉄製紡錘車・刀子、灰釉陶器坏・瓶等がある。



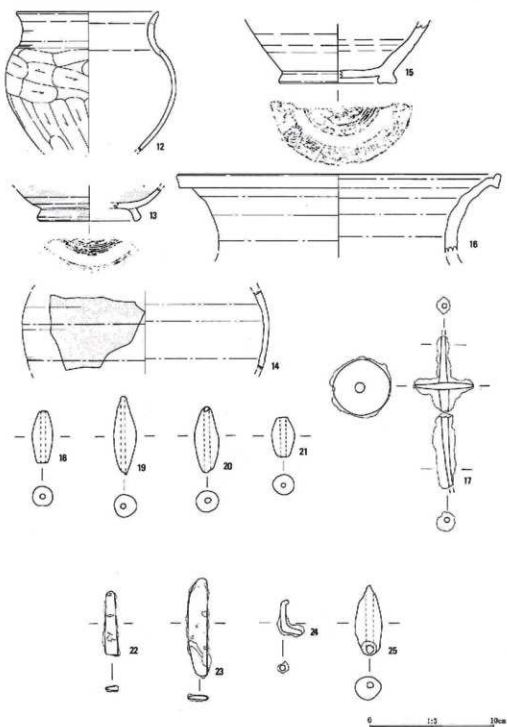
第66図 46号住居跡図



第67図 46号住居跡遺物図



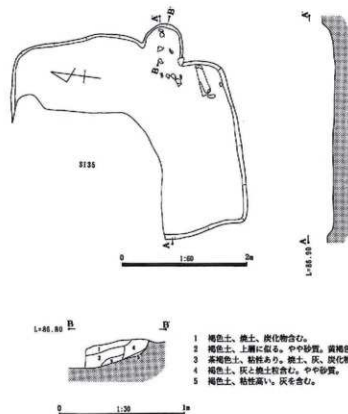
第68图 46号住居跡遺物図



第69图 46号住居跡遺物図

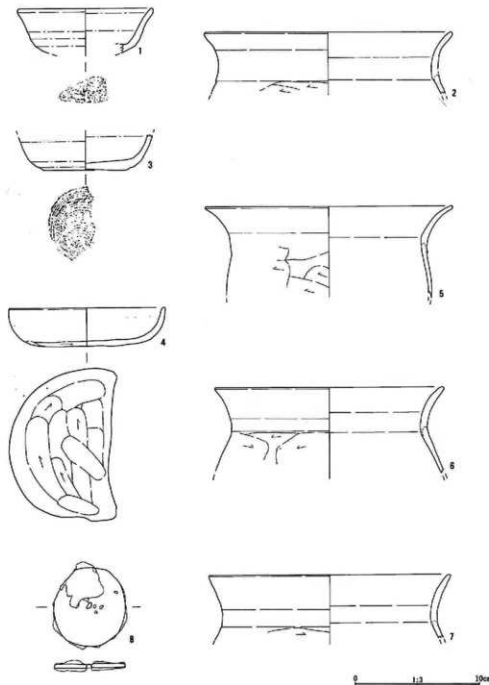
49号住居跡

6区で検出した。48号住居の南東の位置である。35号住居と切り合い、35住居よりも古い。規模は東西3.3m、南北3.5m、深さ18cmである。北側がやや幅広く、それに比べると竈の南側がやや狭い。主軸は北7度西を向く。竈は住居の南東部にある。袖は南側に河原石を置き、北側は10cm程、地山を掘り残して住居内に突出させている。竈の規模は幅65cm、奥行き55cmである。竈の底は20度程度と緩やかに上っていき、奥で急激に立ち上がる。なお、煙道は検出されなかった。竈の覆土には焼土、炭化物、灰が多量に混入する。また、壁もかなり焼けている。住居内には柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。なお、住居の覆土は暗褐色の自然堆積土で、ゆっくりした堆積と考えられる。遺物は北東部分が35号住居に切られているため、全体像はつかめない。なお、残存部分では竈前に集中する傾向にある。1、3は須恵器環でかなり口径が小さい。4は土師器環である。やや底が偏平である。2、5、6、7の土師器環は口縁が緩やかに外反する形態である。8は鉄製紡錘車である。



- 1 褐色土、焼土、炭化物を含む。
- 2 褐色土、上層に広がる。やや砂質。黄褐色土ブロックを含む。
- 3 黄褐色土、砂質。焼土、灰、炭化物を含む。
- 4 褐色土、灰と焼土を含む。やや砂質。
- 5 褐色土、粘性強い。灰を含む。

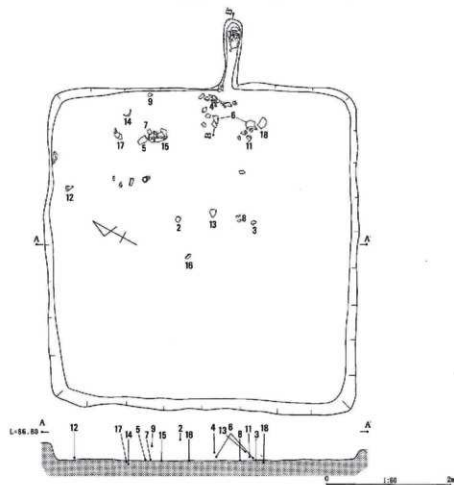
第70図 49号住居跡図



第71図 49号住居跡遺物図

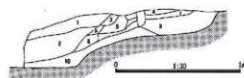
50号住居跡

6区で検出した。38号住居の西となる。40号住居と切り合い、40号住居よりも古い。規模は東西5.2m、南北5.1mと大型である。主軸は北21度西を向く、若干コーナーに丸みを帯びるが方形の住居跡である。竈は東側中央より、やや南の部分にある。住居の外に向かって幅30cm、奥行き1.05mの煙道状の施設がある。しかし、住居内部に竈の袖はなく、一見、燃焼部のない竈のようにも見られる。煙道状施設の内部には、焼土粒や灰が見られるので、この煙道のように細い部分が竈本体の可能性が高い。遺物は住居東半部に散らばるような状態で出土している。土器の残存率は2/3から1/6と低く、廃棄遺物と考えられる。須恵器環は底部に手持ちヘラケズリ手法が見られる。蓋もかえりがしっかりしている。土師器環の小型品は器内がやや厚手で全体に球形である。甕は長胴であり、口縁部分の器内は厚く大きく外反する。



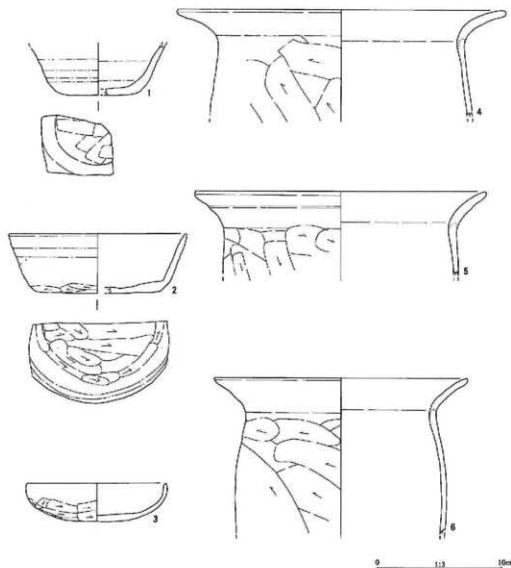
第72図 50号住居跡全体図

B- L-87.00

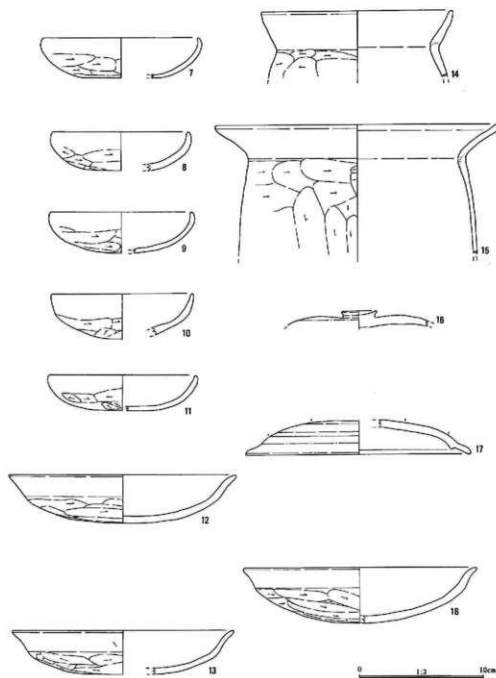


- | | |
|---------------|--------------------|
| 1 灰褐色土。 | 6 赤褐色土。 |
| 2 褐色土、焼土少し含む。 | 7 赤褐色土、焼土層。 |
| 3 赤褐色土。 | 8 赤褐色土。 |
| 4 赤褐色土。 | 9 褐色土、粘土あり。 |
| 5 褐色土、焼土含む。 | 10 褐色土、少し焼土粒と灰を含む。 |

第73図 50号住居跡電セクション図



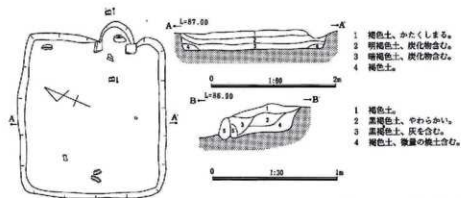
第74図 50号住居跡遺物図



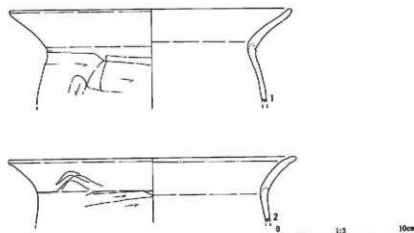
第75図 50号住居跡遺物図

51号住居跡

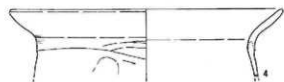
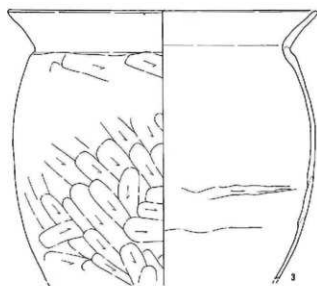
6区で検出した。11号住居の東となる。12号住居の煙道は51号住居の覆土を切って造られている。よって、51号住居のほうが古い。住居の規模は東西2.6m、南北2.4mで、深さ30cmである。壁は70~80度と垂直に近く立ち上がる。主軸を北22度西にとる隅丸方形の住居跡である。竈は住居の東壁、中央やや南寄りに造られている。袖は両袖とも切石を置いている。竈の規模は幅55cm、奥行き50cmで、竈の底面は10度程度とゆるやかに奥に向かい、奥壁では約70度の角度で立ち上がる。竈の覆土には灰や焼土を含む。竈の壁はあまり焼けていない。なお、煙道は検出されなかった。また、柱穴、貯蔵穴もなかった。住居の覆土は壁際の褐色土堆積後、炭化物を多く含む暗褐色土、粘土の多い褐色土の順であり、自然堆積と考えられる。遺物は土師器の甕が出土している。胴部は50号住居のものに比べるとやや球形である。なお、口縁が肥厚し大きく外傾するのが特徴的である。



第76図 51号住居跡遺物



第77図 51号住居跡遺物図



第78图 51号住居跡遺物図